

戰時生活訓

臣道實踐會

特228

279



始



特228
279



戰時生活訓

銃後生活の

生 倫 明
産 理 朗
化 化 化

の爲に



詔書

天佑ヲ保有シ萬世一系ノ皇祚ヲ踐メル大日本帝國天皇ハ昭ニ忠誠勇武ナル汝有眾ニ示ス

朕茲ニ米國及英國ニ對シテ戰ヲ宣ス朕カ陸海將兵ハ全力ヲ奮テ交戦ニ從事シ朕カ百億有司ハ勵精職務ヲ奉行シ朕カ眾庶ハ各々其ノ本分ヲ盡シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ征戰ノ目的ヲ達成スルニ遺算ナカラムコトヲ期セヨ
抑東亞ノ安定ヲ確保シ以テ世界ノ平和ニ寄與スルハ不顯ナル皇祖考丕承ナル皇考ノ作述セル遠猷ニシテ朕カ拳々措カサル所而シテ列國トノ交誼ヲ篤クシ萬邦共榮ノ樂ヲ偕ニスルハ之亦帝國カ常ニ國交ノ要義ト爲ス所ナリ今ヤ不幸ニシテ米英兩國ト鬩端ヲ開クニ至ル洵ニ已ムヲ得サルモノアリ豈朕カ志ナラムヤ中華民國政府曩ニ帝國ノ眞意ヲ解セス濫ニ事ヲ構ヘテ東亞ノ平和ヲ攪亂シ遂ニ帝國ヲシテ干戈ヲ執ルニ至ラシメ茲ニ四年有餘ヲ經タリ幸ニ國民政府更新スルアリ帝國ハ之ト善隣ノ誼ヲ結ヒ相提攜スルニ至レルモ重慶ニ殘存スル政權ハ米英ノ庇蔭ヲ恃ミテ兄弟尙未タ斷ニ相聞クヲ

悛メス米英兩國ハ殘存政權ヲ支援シテ東亞ノ禍亂ヲ助長シ平和ノ美名ニ匿レテ東洋制覇ノ非望ヲ逞ウセムトス剩ヘ與國ヲ誘ヒ帝國ノ周邊ニ於テ武備ヲ増強シテ我ニ挑戰シ更ニ帝國ノ平和的通商ニ有ラユル妨害ヲ與ヘ遂ニ經濟斷交ヲ敢テシ帝國ノ生存ニ重大ナル脅威ヲ加フ朕ハ政府ヲシテ事態ヲ平和ノ裡ニ回復セシメムトシ隱忍久シキニ彌リタルモ彼ハ毫モ交讓ノ精神ナク徒ニ時局ノ解決ヲ遷延セシメテ此ノ間却ツテ益々經濟上軍事上ノ脅威ヲ増大シ以テ我ヲ屈從セシメムトス斯ノ如クニシテ推移セムカ東亞安定ニ關スル帝國積年ノ努力ハ悉ク水泡ニ歸シ帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ事既ニ此ニ至ル帝國ハ今ヤ自存自衛ノ爲斷然起ツテ一切ノ障礙ヲ破碎スルノ外ナキナリ
皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ朕ハ汝有眾ノ忠誠勇武ニ信倚シ祖宗ノ遺業ヲ恢弘シ速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス

御名御璽

昭和十六年十二月八日

戦時生活訓

- 一、毎朝神宮及び宮城を遙拜し忠誠の誓を捧ぐべし
- 一、朝夕神佛に仕へ自己の今日あるを謝すべし
- 一、國の法を守りもろもろの規約に従ひ、約束したる事は必ず之れを實行すべし
- 一、率先挺身して難局に赴き他人のやりたがらぬ仕事に従ふべし
- 一、萬事長上に随ひ理窟いふべからず
- 一、禮儀作法を正しくし言葉を慎むべし
- 一、虚禮を一掃し末技にこだはらず直ちに用務を辨すべし

4

- 一、分に安んじ待遇所得に文句あるべからず
- 一、明朗闊達常に笑微を以つて人に接すべし
- 一、身邊無用の物をまとはず飲食にこごとと言ふべからず
- 一、物資を愛護し天物を空しうすべからず
- 一、常に研究怠らず創造發明に努むべし
- 一、父母を敬ひ老を先にし以て子弟の模範たるべし
- 一、隣保互に扶け親和協同の實をあぐべし
- 一、毎日必ず汗を流し以て旺盛なる活力を養ふべし

(臣道實踐會本部選)

5

目次

對米英宣戰の大詔

總說

絕對訓

第一 敬神

第二 崇祖

第三 遵法

基本訓 その一

第一 挺身

第二 隨順

第三 禮讓

第四 純樸

一

四

四

二

一五

三

三

二六

三

三七

第五 安分

第六 明朗

基本訓 その二

第一 簡素

第二 愛資

第三 創造

第四 孝養

第五 隣保

第六 愛汗

結 盟

戰時生活訓註釋

臣道實踐會

四二

五

五

五

五

六

六

七

七

七

八

二九

例
△皇國三千年の歴史は勝利の記録である。我等亦國難に赴きては義勇奉公、後世に昭和國民の光榮を傳へんのみ。これ本書がその總説に於て、新たなる覺悟を唱道する所以。

△長くも宣戰の大詔を拜して 大御心を安んじ奉らんとする者、その力倆、至誠、努力、常に反省怠るべからず。即ち本書が絶對訓、基本訓その一及その二に於て力説する處。

△一億一心、大東亞戰爭完勝の念願に燃ゆる秋、なほ前線と銃後の一體化に想到すべし。誰か本書が結盟に於て主張するところの、戰時生活倫理化運動に挺身せぬ者あらう。

△三篇十五條、その一訓を實踐するも可。一章を朗誦するも亦可。以て八紘爲宇の大理想顯現に邁進し、臣節を盡さんことを誓ふべし。(執筆者志垣寛、長里清、龍野定一)

言

例

戰時生活訓

總 說

大東亞戰爭に勝ちぬき、アジアに新しい秩序を打ちたて、十億の民をして各その生活をたのしましむることは、日本民族の上に課された大きな役目である。この大使命を達成するために、現に皇軍は南北太平洋の隅々小さな島々、極寒のアリューシャン群島から猛暑の南洋に至るまで、まつろふものを愛撫しまつろはぬものどもを討ち従ふべく、惡疫天險を克服し乍ら、血みどろの烈しい戰に従つてゐる。快勝相次いで至り、皇威は既に敵膽を寒からしめてゐる

が、しかし敵は名にし負ふ大國であり、豊富なる物資と進歩せる科學を有する英米である。その富を傾けその精をつくして夜を日につぐ軍備擴張——夥しい航空機や、巨大な航空母艦の建設に全力をつくし以て長期に互るゲリラ戦を企て、皇土襲撃の機會をねらつてゐる。かくてこの戦は何時果つべくとも見えな^(二)い。恐らく精銳なる皇軍が米本土に上陸し、米大陸を平定するまでは彼等も亦矛を收めないであらう。吾等は斷じてその日の來るまで戦はなくしてはならぬ。

2

然し乍ら今日の戦争は總力戦である。武器を取つての敵に勝ち、科學の戦に^(三)克ち、物資の生産に於て勝ち、思想の戦に勝ち抜かなくてはならぬ。たとひ武力の戦に勝つてもその他の戦に於て敗けたならば、最後の勝利を得ることは出來ない。敵はそこをねらつてゐる。この敵のねらひを打ち破つて總力戦の快勝と相まち、科學戦、經濟戦、思想戦に打ち勝つためには、銃後國民に於て今に

數倍する非常なる決意を以て日常生活の一大革新を計らなくてはならない。然らば如何なる事を、如何に革新すべきであらうか！

銃後生活建設のよき手本は、吾等の祖先が生活して來た歴史の中にたやすく求めることが出来る。思ふに戦前に於ける吾等の生活は政治經濟文化すべての方面とも物質を第一とする歐米の模倣に過ぎなかつたのである。故に國民の信仰は衰へ人々は我利私慾に走り、禮儀はすたれてじだらくに流れ、名物の外に尊いもののあることを忘るゝに至つた。この歐米依存の風潮を一掃し、日本本來の生活の姿に返ることが第一である。そしてこのことは早く既に教育勅語の中に明示されてゐる。従つて吾々は一に勅語の御訓を忠實に實行すればよいのであるが、特に戦時生活の革新指標として次の各項を撰んだ。忠誠なる國民の挺身實踐すべき事項であり、天業翼賛の大道であることを信ずる。

3

絶對訓

第一敬神

毎朝神宮及び宮城を遙拜し忠誠の誓を捧ぐべし

一、日の出と共に起き顔を洗ひ口をすゝいで身を淨め、服装を正し、何事も考へず心を一にして伊勢神宮並に宮城を遙拜すべし、次で遠く戦線にある皇軍の武運長久を祈ると共に、戦歿將兵の冥福を祈つて靜かに默禱を捧ぐべし。

一、神棚に向つて二拜二拍手一拜の禮をなすべし。

總て神に詣る時には身心を淨めてから詣らなくてはならぬ。身を淨むることを

外清淨と云ひ、心を淨むることを内清淨と云ふ。毎朝冷水浴や冷水摩擦を實行すれば外清淨として此上もない。一夜の間にこびりついてゐる汗やよごれを洗ひ落とし、よく口をすゝいで口中の穢も去り、服装を正してから神に對すると、心の中も自然さつぱりとして来る。神に詣るにいろいろと註文があつてはいけない。殊に自分の福利を神に念するなどは愚な事である。神は名利の外にあらせらるゝから、名利を思ふことは既に神のみ心に逆く事である。只だ何事も思はず白紙のやうな心になつて詣るべきである。それが内清淨である。たゞ神の御蔭を以て今日ある事を感謝すればよい。天皇の御恩、皇軍の御恩、父母の恩、師の恩、天地萬物の恩など、諸々の恩に對して感謝する氣持が、やがて忠誠となる。若しさう云ふ氣持になることが出来たら、その人はもう神のやうな心になれたもので、何事も祈らなくても自然と神は守つて下さる。古歌に曰く

「心だに誠の道にかなひなば祈らずとも神や守らん」と。

敬神の念が厚いと云ふ事が日本人の大きな特色であつたが、西洋の思想がはいつて來てから、この風がだんだん廢れて來た。神も佛もあつたものではない、頼りになるのは自分ばかりだと言ふのは西洋流の考へ方だ。西洋流の考へ方では何でも俺が俺がで、世の中に自我より尊いものはないと考へる。つまり神の存在を否認し、自分が神になつたつもりである。だからみんながみんな自分が一番偉いものゝやうに思ひ、てんでんばらばらで自分勝手な事をするやうになる。國家にも社會にも中心がなくなり、國民のよりどころがないのである。そのくせ大病にかゝつたり、非常な困難にぶつゝかり、生死の境に遭遇すると無意識に神佛を禱るのが人間である。

西洋でも支那でも昔は神を信じた。然し西洋や支那の神は天に居られる。人

間世界の外に居つて人間の事や自然の事を支配して居られると信じてゐた。だから科學が進歩して來ると、そんな神さまはどこにも居ないではないかと云ふ事になる。日本の神はそれとは全く違ふ。日本の神さまは生きた人間であらせられる。高天原に居られた八百萬神々を初め、一億國民が朝夕尊信怠らぬ天照大神がそれである。この神々は天地萬物を創り成された方々である。だから神であつて人であり、人であつて神である。日本はこの神の御末によつてすつと治められて來た。二千六百年來それは絶対に變ることのない歴史的事實である。だから 天皇は神の御末であり、神そのものであらせらるる。 天皇の事を現人神と云ふのはそのわけである。

大君は神にしませば天雲の雷のうへにいほりせるかも (柿本人麿)

高天原以來この國を創り、この國を治めになつたもろもろの神々は、何れも

皆この國に留つて吾々臣民を見守つてゐて下さる。「神靈上にあつて照覽し給ふ」と言ふのはこの事である。北畠親房卿が「大日本は神國なり」と云はれた(九)のもかう言ふ點からである。國は神國であり國主は神皇であり、然して臣民の行ふ道も亦神の道である。即ち吾等は一念忠節を全ふせねばならぬ。

吾々は元寇の役で神風が十萬の元軍を博多灣の藻屑として了つた事を知つてゐる。西洋流の考にかぶれたものは、二度と神風は吹かない、あれは偶然の現象にすぎないのだと言ふ。然しあの眞珠灣攻撃の時の暴風はどうであらう。まさしくあれは神風ではないか。否、日本がだんだん西洋にかぶれて行末が危くなつた時、こんどのやうな戦争が起つて國民の自覺を呼び起した事そのこと自體が、まさしく神のなしませる業である。

されば國民は常に神を信じ、神を念じ、神に仕ふることを忘れてはならぬ。

(一〇)この信仰が薄らいだらこの國も亦危い。敬神の念を厚くするためには、朝々の參拜だけでなく、何時でも機會あるごとに郷土の神社に參拜すべきである。日本(一一)の郷土社會は神社を中心にして出來上つて居る。昔から重大な事は一々神に報告し、神のお告げに従つて來てゐる。秋の祭は神の御蔭によつてよく穫つた五穀を神に捧げ、神に感謝するお祭である。日本の神々は臣民と共に永くこの國に留つて居られるから、人々は神と共に喜び合ふのである。

家も亦神を中心にして成り立つてゐる。一家の重大事は神棚の前に報告しなければならぬ。家に出來た作物は、神の御力によつて實つたものであるから、そのお初穂をまづ神にさゝげなくてはならぬ。一房の葡萄一個の茄子もまづ神にさゝげて後に口にすべきである。

一日十五日には必ず新にお神をあげ、神酒（神水を以て代へてもよい）を供

へ神燈を献じて祀らなくてはならない。

昔はすべての人々が伊勢に詣ることを以て一生の念願とした。今は國民學校時代に學校から詣る風が盛んになつて來たが、一人前になつたらやはり一人で一度は參詣すべきである。結婚したり、一家をもつたりしたやうな場合にはまづ伊勢に參詣し、それから郷土の神社やお墓に詣るやうありたい。畏くも皇室に於かせられても、その重大事に當つては必ず神宮に參詣あらせらるゝ。内閣の更迭毎に大臣たちが伊勢に詣るのも亦わが國の美はしいならはしである。

10

明治天皇御製

とこしへに民やすかれといのるなるわが代をまもれ伊勢のおほかみ
わが國は神のすゑなり神祭る昔の手ぶり忘るなよゆめ

第二 崇 祖

朝夕神佛に仕へ自己の今日あるを謝すべし

一日の活動を了へた後で、家族打揃つて夕餉の膳に向ふときほどたのしいものはあるまい。この樂みは更に祖先を加ふることによつて倍加する。どこの家にも祖先の位牌を祭つてあるであらう。神でも佛でも或はキリストでも宗派の何たるを問はない。その家の信仰に従ひ祖先を祀るところがあるから、その御前に燈明をかゝげ、或は香をたき、或は花を上げて、一家一族の今日あることを謝した後、夕の膳に向つたら、見へぬ祖先もその席に列つた思ひで、どんなにか奥床しいだらう。

お蔭様で今日も亦無事に過すことが出來ましたと、祖先が眼の前に居ます様

11

に申上げるがよい。若し到來物があつたり、何か特別の御馳走が出來たりした場合は、同じやうに御位牌にもお供へするがよい。祖先のみ靈は長らく家にあつて子孫の仕ふるところを見て居られる。子孫がよく仕へてくれれば喜ばれるし、粗末にすれば不愉快に思はるゝのはきまつた事である。祖先の喜びがやがて一家の繁昌の基となるものである。

日本の家は西洋の家とは違つて、祖先と家族が一團になつてゐる場所である。日本の家はたゞ寝たり食つたりする場所ではない。祖先をお祀りする場所であり、一族一家が和合歸一する所である。一家の人々は家長によつて統べられ、家長は祖先の心を受けついで之を子孫に引きつぐ役目をもつてゐる。だから家長の心に逆いて一人一人が勝手な事をするのも許されず、家長が自分一人の考へで家の重大事をきめるのも許されない。家の重大事は必ず祖先に告げ祖

先のみ心を汲んで行はるべきである。これが世界に比のない日本の美しい家族制度である。^(二三)

だから娘は他に嫁ぐときは、お位牌に別れを告げて出かけ、又新に迎へられた嫁は、その家の祖先の前に誓をしなくてはならぬ。家の前には個人個人の權利と云ふものは認められない。家族の一人の罪は一家の罪であり、一門一族の罪である。だから祖先の名を恥かしめないと云ふことが日本人にとつては最も大きな勤めである。

朝夕の奉仕の外に、祖先の命日にはかつて祖先が存命の時に好まれた品など供へ、家族揃つてお参りするがよい。^(二四)彼岸や盆に祖先を祀るのは日本の慣はしである。この美しい習俗を守るとは、日本が益々強大になる所以であるから必ず續けなくてはならぬ。墓地を淨め、花をあげ香をたき水を供へて祖先の墓

に參るべく、故郷を離れてゐる人も年に一度の墓參を怠らぬやうにしたいものである。よきにつけ悪しきにつけ一家に重大な事があつた場合は、必ず祖先の墓に參り、父母をます時のやうに報告して、喜びを分ち悲しみを共にすべきである。かくする事によつて喜びは更に増し、悲しみは自ら慰めらるゝであらう。

家の觀念のない西洋人が個人主義になるのは當り前である。わが國でも人々が家を忘れたらやはり個人主義になつて了ふ。昔の武士が戰場に於て名乗りをあげ、「この手の大將は誰人だ、名乗り給へ。かく申すは清和天皇九代の後胤左馬頭義朝が嫡子、鎌倉の惡源太義平、生年十五歳。」と必ず祖先から名乗つたのは、自分一人が戦つてゐるのではなく、祖先も一しよになつて戦ふのだと言ふ證據である。今日は戦争の様式が變つて、一々名乗りをあぐる事も出来な

いが、この心掛は戦線の勇士が片時も忘れないところであらう。戦陣訓にも、「戦陣深く父母の志を體して、克く盡忠の大義に徹し、以て祖先の遺風を顯彰せんことを期すべし。」と訓へてある。

明治天皇御製

つくくと思ふにつけて尊きはとほつみつやの御稜威なりけり

第三 遵 法

國の法を守りもろもろの規約に従ひ約束したる事は必ず之れを實行すべし

上は憲法より下は町内會や隣組の申合せ規約等に至るまで、かうと定められた事には絶対に服従し、正直に之れを守つて行かなくてはならぬ。

法律や規約は社會生活の秩序を保つために出來てゐるもので、絶対に必要な事である。人が見て居ないから誰も知らないであらうなどと思つて、これに背くやうな事があつてはならぬ。天知る地知る己れ知る。隠れたるより現はるゝはない。神がみそなはして居られるのである。或哲學者が獄中にある時、その弟子が秘かに脱獄をすゝめに來たが、かれは今誰もゐないからと云つて錠を破つてはならぬと云つて、之をきかなかつたのは有名な話である。心に神を失つた人々は神の恐ろしさを知らないからよく法に背く。所謂「闇」と稱するものなどその好い例である。法に逆き闇を犯して僅かばかりの儲けをしても、自ら省みてやましいから心は決してたのしいものではなからう。罪の現はるゝ日を恐れて何日もおどくしてゐなくてはならない。さう云ふ人は自然に心がくもり人相が悪くなつて來る。必ず近いうちに恐ろしい酬が來るにきまつてゐる。

しかし世の中には法規に背いて平氣でゐる不屈者もゐないではない。少し位は牢にはいつてもかまはない。儲けさへすればよいと云ふ者の者さへ出て來た。それは全く人の皮を着た禽獸である。日本人とは云へない。恥知らずである。吾々は心を協せてさう言ふ事を防がなくてはならぬ。昔は村の規約に背いて自分一人勝手なことをするものに對しては、村からこれをのけ者にすると言ふ罰(一五)のしかたがあつた。村の退け者になると村人の誰もが交際つてくれない。いろいろな生活の便宜も奪はれあまつさへ村の祭には、神さまがその家を見舞はれる。神輿がかつきこまれて家が打ち壊される。とうとうその村に居られなくなり、夜逃げしてどこかの村に行つても、よその村ではそれを渡り者として仲間にしてくれなかつたものである。今でもすつと田舎に行くとさう言ふ習慣(一六)が残つてゐるところがある。この習慣はこれをそのまま今日生かす事はむづか

しいかも知れないが、この精神はよみがへらすべきである。吾々は心を協せて法を守り、法に背くものは退けなくてはならぬ。闇を犯すものがあつたら堂々と忠告もし、警察にも訴へるがよい。みんなよつてかゝつて恥知らずを笑ふやうになつたら、自然さう言ふものもなくなるであらう。

この世の中を住みよくするためには、どうしてもいろいろな規則を定めなくてはならぬ。法律ではなくても、みんなに守つて貰ふやう定められた規定には素直に従はなくてはならぬ。停車場や公園や公會堂など人の多く集るところには必ず何かの規定が設けてある。左側通行とか、煙草のむなとか、芝生に入るとか云つた類の事である。さういふ規定を素直に守ることはお互の生活を快くする事である。日本人にはさういふ方面が缺けてゐると思はれるが、それは近頃のことでもまことに恥づべきである。大東亞十億の民衆の指導者とならぬ

ばならぬ吾々は、一日も早くさう言ふ缺點を改め、よき模範を示し得るやうまづ自分の生活から改めて來べきである。

約束は法律や規定と共に必ず之れを守らなくてはならぬものである。約束は自分の都合できめた事であるから、その實行には絶対の責任がある。若し實行困難と思ふなら初から約束してはいけない。何事も慎重に考へ輕々しく約束をしない方が好い。しかし一旦約束した以上は萬難を排して之れを實行すべきである。昔は「武士に二言はない」と云つて、一旦約束した事は命にかけても實行したものである。^(二七)然諾を重んずるとはその事である。

近頃日本人の大きな缺點の一つは約束の時間を守らない事である。各種の會合の時間など、とかく後れがちなのは誰もが皆困つて居るであらう。一人や二人の遅參者のために全體の人が失ふ時間を合せたら大きな損失となつて來る。

「時は金なり」と云はれる。約束の時間を守らない者は他人の寶を盗むにも等しい。

昔から日本に行はれてゐる茶の湯の會では必ず案内の時間の十五分前に行くことになつて居り、それがよく實行されて來た。今日でも汽車の時間を初め、學校でも會社でも、工場でも、時間は嚴重に守られてゐる。だから日本人は必ずしも時間觀念の乏しい國民ではない筈である。たゞ個人的な會合の時間にだけだらしがないといふのは、他人の迷惑に對する思ひやりが足りないためであらう。一日も早く改むべきである。

明治天皇御製

かみつ代の御代のおきてをたがへじと思ふぞおのがねがひなりけり

基本訓 その一

第一挺身

率先挺身して難局に赴きやり手の少い仕事に従ふべし

人は誰でも安易な仕事を選び、樂な仕事を取らうとする。これは人間の常である。然し幼少の頃から安易な道ばかり歩いて來たものは例へば温室の中の花の如く、一度外氣の嚴しさに打たるゝと忽ちにして枯れて了ふ。人も亦苦難の經驗を経なければ強い意志も盛んな活力も養はるゝものではなく、世の荒波を乗切る氣丈の人物となることは出來ない。獅子はその仔を千仞の谷底に突き落して、仔の力を試みるといふ。この苦難に打ちかつて來て初めて百獸の王たる

ことが出来る。

吾々は今次の大東亞戦争に於ても、戦陣の勇士たちが、しばしば率先難局に挺身した話を聞いた。^(一九)眞珠灣攻撃の九軍神の如きはいふ迄もない。陣中常に自ら求めて危地に赴くことを希ふのは帝國軍人の精華である。^(二〇)これ等の精神を直ちに吾等の銃後生活にも活かさなくてはならぬ。即ちまづ、

就職の途を選ぶならば喜んで困難な仕事を求むべく、

既に職場がきまつたなら、その場に於て最もむづかしい部面を受持つべきである。

或は多人數集つて何か仕事をやらうとするやうな場合、率先してまづ勞多き事に従ふべきである。くじを引いてやさしい仕事から順番にきめるなどは愚心事である。

役所、學校、工場、事務所等々に於て、日常勤務作業の間にもさういふことは度々あることであらう。例へば工場の清掃作業を工具にて分擔實踐する場合があるとする。誰もがやりたくないと思ふのはどんな仕事であらうか。恐らく便所の掃除であらう。志あるものはまづさう云ふ時に好んでそれを引き受くべきである。

大勢一しよにゐる時、誰か一人立つてみんなのために用を辨じなくてはならぬ事が起つたら、人の立たぬ前に身輕に立つてその用を辨すべきである。かくの如くして初めて心も體も鍊成され、玉のやうな性格が築かれる。「艱難汝を玉にす」とはこの事である。

ぜいたくをし、何時も樂な道ばかり歩いてゐるものは、生活力が衰へて來る。學者の專問的な調査による^(二一)と世界の貴族は日本の皇室を除くとみんなだん

だん亡びつゝあると云ふ。貴族ばかりではない。あり餘る財貨に埋もれ苦難を知らぬ富豪階級の末路も亦同じである。大都市で成功した富豪で三代と續くものは殆んどないといはれてゐる。これに反し古來偉人傑士といはるゝ人は、概ね幼少の頃苦難の道を経て來てゐる。「苦多ければ樂多し。だ」

杉浦重剛先生（今上陛下東宮にましました頃帝王學を講ぜられた人）の座談錄に次のやうな話が出てゐる。

「先生曰く。今日は大變面白いことを聞いた。天津の俠客に吉井千代吉といふ男がゐるが、有名な清水の次郎長が天津に來た時、吉井に會つて、お前は毎日神佛を拜むぢやらうが何と云つて拜むかときいたので吉井が、惡事災難免れますやうにといつて拜むといふと、そんな事で何の役に立つ、惡事災難に出遇ふやう祈れと一喝をくはしたさうぢや流石大親分といはれた人だけあつ

て立派な事をいふと思つた。」

と。「憂きことのなほこの上につもれかし限りある身の力ためさん」——この意氣がなくては大人物にはなれない。

國民が皆、樂な道を選び、そしてぜいたくに暮すやうになると、その國民の生活力は衰へ、繁殖の力も乏しくなり、國民の人口はだんだんと減つて來る。その好い例はフランスだ。日本人はこれから大東亞共榮圏の各地域にどんどん發展して行かなければならぬので、いくら人があつても足りない。人口の増加は今の日本にとつて最も緊急な事であるが、そのためには國民各自が、更に困苦窮乏に堪へ、難局に打ちかつて行く生活をする必要がある。働かずとも苦まずとも樂に食つて行ける南方の民族が、頭も悪く一向に榮えて來ないで、寒氣きびしく食物も不足がちな北國の人々がだんだん指導的地位を占めて

行きつゝある現在の事實について深く思ひを致すべきである。

明治天皇御製

いかならむ事にあひても撓まぬはわがしきしまの大和だましひ
あらはさむときはきにけりますらをがときし劍の清き光を

第二 隨 順

萬事長上に隨ひ理窟いふべからず

日本精神とは何かと問はれたら、何と答へるであらう。之れをむづかしい言葉で云ひ表はす事は知らなくても、何の文句もなく喜んで一命を大君にさげ奉る心であると云ふ事だけは苟も日本人である以上、誰もが知つてゐる事である。天皇の勅さとしの前には何の躊躇もなく、たゞ御言葉のまゝに従ふ事は、肇國の

昔から日本人が行ひ來つたところである。聖徳太子憲法の中には「詔を承けては必ず慎め、謹ますんばおのづか自ら敗れん」と示されてある。この御訓(三三)は今すつとその通りに守られてゐる。

大國主命が天照太御神の命を奉じて、永年培ひ治めて來られた根の國（出雲地方）を喜んで大御神に奉獻された事を初めとして、苟くも日本國民であるものは、大君の御言葉を畏み奉り、みことのまゝに隨ふことを以て一代の光榮として來た。そしてこの事は單に大君の勅に對して許りでなく、自分の仕へてゐる主人や、自分の先生や、或は閱歴年齢に於て自分の上にある人々の言葉に對しても、何の文句もなく快く従ふと云ふ美風を作つて來た。武家時代に於ける武士がその主君のために絶對從順であつた美談佳話は歴史の上に數限りなく傳へられてゐる。

眞宗の開祖親鸞上人が「たとひ法然上人にすかされまゐらせて念佛して地獄におちたりともさらに後悔すべからず候」と云つて、自分の師匠法然上人に絶對に隨順されたのは有名な話である。^(二三)

この美風があつたために、二千六百年の長い間わが日本は一条亂れず統一されて來た。そしてこの美風が今も尙強く傳へられてゐるがために日本の軍隊は世界無比の強さを持つてゐる。陣頭に立つて發する上官の一令に對しては、死ぬことをおそれぬはもとより、誰れ一人逆ふものないのが軍人の常である。

君のため何か惜まむ若櫻散つて甲斐ある命なりせば

かう詠じて従容眞珠灣頭に軍神吉野繁實少佐は殉忠の花と散つた。

長上の命に絶對隨順することは、たゞに軍人のみの專有することではない。

銃後のあらゆる職場に於ても亦この精神を活かして行かなくてはならぬ。明治

以來歐米の教育が廣く行はれ所謂知識階級と稱する學校出の人物が殖ゑて來たことは、日本の文化を高むるために少なからず効果のあつたことであるが、これらの人々の大きな缺點は理窟が多くて実行力が乏しいといふことである。彼等はいろいろの事を學び多くの事を知つてゐるために、長上の言に對しても、とかく何かと一言いつて見なくなる。「盜人にも三分の理窟」といふ事が云はれる位だから、時によつてはそのいふ事に正しい道理があることもあらう。然し一人が云へば他の一人も亦何か云ふであらう。そして右からも左からもいろいろな意見が續出したら、何れに従つたら好いであらうか。あゝでもない、かうでもないといふ事になつて遂に事は中止されねばならぬ。

由來日本は昔から「言あげせぬ」^(二四)ことを以てほこりとして來た。「言あげせぬ」とは理窟を言はぬといふ事である。議論をせぬといふ事である。彼これと

理窟を言はず黙々として直ちに實行するところに日本の美風があつたのであるが、今日は餘りに理窟が多すぎる。所謂議論倒れは今日の大きな弊風である。吾等は祖先が自ら實踐して示した美風を復興して、隨順の徳を日々の生活の上に築いて行かなくてはならぬ。

(二五) 萬葉集に「ひさかたの天道は遠しなほなほに家に歸りて業をしまさに」と云ふ山上憶良の歌がある。この歌は大きな事ばかり云はずにさつさと家に歸つて家業に従事しなさいと云ふ意味であるが、日本人の性格を表はしてゐて面白い。

これはたゞ職場だけの事ではない。家にあつては父母兄弟の言に従ひ社會にあつては先輩年長者の旨に従ふべきである。昔氣質の老人と現代の教育を受けた青壯年との間には、物の見方考へ方にもいろいろと違つた點があるであらう。

う。長上のいふことが必ずしもよろしからずと思ふ事があつても一應は之れに従ひ、適當な他の機會を見て徐ろに進言すべきである。だからと云つて罪惡を強ひられても唯々としてこれに従へと言ふ意味でない事は勿論である。

明治天皇御製

鬼神もなかするものは世の中の人のこゝろのまことなりけり

第三 禮 讓

禮儀作法を正しくし言葉を慎むべし

古來我が國は君子國(二七)と云はれ、禮儀の正しい國として知られて來たが明治大正の頃から次第に禮儀が廢れ、國民が無作法になつて來た。禮儀は元來相手の人を敬ふ心から生ずるものであるから、禮の廢れた事は、人々互に相敬ふ心が

薄らいで来た結果である。何故互に敬ふ心が薄らいだであらうか。これも歐米の思想がもたらした結果に外ならない。即ち近代歐米の所謂民主主義は四民平等無差別である(二八)と云ふ立場に立つものである。従つて彼も人なり我も人なりで、たとひ自分の目上の人であらうとも人間に變りはない、何ぞ特別に頭を下げ辭を丁寧にする必要があらうかといふ考が、人々の頭を支配するやうになつた。だから自然相手を自分と同等に見る。或は自分以下に見ようとする。さうなつて來るととりたてゝ禮儀を正しくする要もない。向ふの方でも同じやうに考へてゐるから、何の俺の方からお辭儀をするものかとかまへてゐる。結局どちらからも禮らしい禮をせず丁ふことになる。そんなわけでだんだんと禮儀はすたれて來た。

「昔は三尺去つて師の影を踏まず」と云ひ、師弟の間にはする分嚴重な禮が行

はれたものであるが、この頃では教師と生徒はまるで友達のやうになり、ほんの一寸頭はさげるが、師を敬ふと云ふよりも師に親しむ風が強く、正しい禮儀の行はれる來は少い。師弟互に相親む事は元よりよい事ではあるが、親しい仲にも禮がなくてはならぬ。親子の間は勿論夫婦兄弟の間にも夫々の禮があり、妻は夫に對して手をついて物をいふと云ふ風であつたが、この頃の夫婦間には全くさういふ事はなく、甚しきに至つては寢ころび乍ら妻が夫を呼び、子が親を呼ぶものさへある。禮儀も作法も全く地を拂つたといつて好い。

禮儀は社會の秩序を保つ大切なくさびである。禮儀のない社會には秩序がなく、やがてその社會は納まりのつかぬものになつて了ふ。道を歩くにしても禮儀正しい社會では人々先を争ふ事もないが、禮がすたれた社會では後から來て人を突きとばして行く事も平氣である。今日はまさにそれに近い状態ではなか

らうか。

禮の根元は敬であり、その表はれは讓である。他人を敬つて居れば自ら讓る心が出て来る。何事も他に讓つてほしい。停車場で切符を買ふとき、車に乗り込む時、席に腰かける時、すべて他に讓る事は禮である。便所のはきものをちやんと向きかへて出ることも讓る心の表はれである。人にあつて腰をかゞめ頭を下げることも亦、どうぞお先にと讓る心の表はれである。凡そ吾々の日常生活に於て、人に接する場合、いついかなる場合でも禮を忘れてはならない。

いかなる場合、いかに身を處すべきかを細かに定めた國民禮法といふものがあるが、禮法を知らなくても心に於て他を敬ひ行に於て地に讓るところあれば、それは自然に禮法(二九)に適つて来る。要は相手に不快な思ひをさせぬやうにする事である。

然し禮儀作法(三〇)は人に對する時にばかりあるものではない。人の居ない處でも行儀を正しくし不法法の振舞をしてはいけない。それについて面白い話がある。ある家に強盜が忍び寄り祕かに家の様子をうかゞつた處、折からその家の若い娘がたゞ一人、夕の御飯を炊いてゐた。これ幸と強盜が押し入らうとする時、娘は鍋の蓋をとつて御飯の煮え加減を調べるらしく、飯粒を丁寧に蓋の上にはさみ上げ、それを箸の先でつぶし見た。飯粒をいきなり齒でかんで見るだらうと思つてゐた強盜はこのつゞましい娘の作法を見て、いたく感激し急に心をひるがへして逃げ去つたと云ふのである。

言葉は最もよくその人の心を表はすものである。近來はだんだん敬語がすたれ、長上に對してさへ同等の言葉遣ひをする人が多い。子が親に對して亂暴な言葉遣ひをするなど珍らしくない。言葉のぞんざいなのは自己の教養の乏しさ

を告白してゐるのであつて、恥の上もないことである。日本の言葉は男女の相違によつても區別があるものであるが、近頃は女にさへ君と呼び、女も亦自らわしがなど、男のまねをする風が流行する。けがららしい事である。

言葉(三二)を慎むとは、言葉遣ひを正しくする事だけではない。人と接する時など多く語らない心掛が必要である。話しても自分自身の事を話題とせず、つとめて相手の事を聞くやうにすべきである。とかく女は口數多く他の迷惑もかまはず滔々と語るものであるが、女が多辯ほどこいやすいものはない。殊に電車の中などで隣の人に聞へる太聲で話をするなど、はしたない極みである。昔から口は禍の門と云はれ、言葉故に飛んだ禍を招いた例はどの位多いか知れない。(三三)雉子も鳴かずば打たれまいと云ふ。輕率にむだ口をきいて人を怒らす勿れ、徒らに漫談に耽つて時間を空費する勿れ。沈黙ほど雄辯なるはない。

明治天皇御製

眼に見えぬ人の心のよろこびも聲によりてぞきゝしられける

第四 純 樸

虚禮を一掃し末技にこだはず直ちに用務を辨ずべし

心に尊敬の念があつて、之れを形に現はさなくては禮にならない。(三三)禮は實踐を以て第一とする。けれども形ばかりで真心のこもつてゐない禮は眞の禮とは云へない。世には心に尊信の念なくて口さきだけにうまいことを云ふものあり、心中腹黒き事を考へ乍ら、うはべだけいんぎんを極むるものも少くない。或は世間體(三四)をつくるはんがために柄にもなき外見を張り、他人に引きすられて心にもないお務めをするものも多い。總てかくの如きを虚禮と云ふ。虚禮は生

活を繁雜にし無用の入費を用し却つて相手に迷惑を與ふるものである。生活を切りつめ、時間を節約し、萬事をつつましやかにすることが戦時生活の要諦であるから、よろしくかゝる虚禮は一掃すべきである。

手紙や文書を以て用務を辨じ、或は直接面談して事を果さうとするやうな場合に於ても、しばしば繁文縟禮に追はるゝ事がある。長々しい前置の後で僅か一言二言の用向を述べたり、長談議に耽つた後で初めて用件に移るなど、多忙な人にとつては誠に心なき業である。すべて用件は簡單明瞭率直に之れを告ぐるが好い。長たらしい前置をしなくては失禮であると思ふ人があるかも知れぬが、それは却つて迷惑である。

「檀那寺食はせて置いてさてと云ひ」といふ川柳がある。お寺の坊さんが、門徒の人を呼んで何か用向をたのむのに、まづ御馳走をして長々と世間話をや

り、きげんを取つて、日もやうやう暮れ方になる頃になつて初めて「さて今日皆さまに来ていただきましたのは、實は……」といつて用向をきりだす事を巧みに諷したものであるが、世間にはこの種のことが誠に多い。交戦國民のなすべきことではない。

(三五) 官公署の事務に従ふ人々が、さゝやかな事にも繁雜な手續を要求し、技術の末葉にこだはつて事務を遷延するのは、その罪大衆の虚禮に勝る。須らく簡易明快即決の方針を以て處理すべきである。平和が續くと人々は太平の眠りをむさぼり、奢侈安逸の生活に陥り、役所は頻りに規則を多くし事務を繁雜にするやうになる。かくて虚禮のために日をすごし、規則の研究に實務を休まなくてはならぬ多くの人々が生じて来る。これは何の前兆であらうか。

(三六) 凡そ戦時生活は諸事簡明率直なるを尙ぶ。個人の私生活はいふも更なり。他

とかゝはりをもつ社會生活、或は産業經濟教育等の政治事務に於て、互に無駄を省き親切を旨とし、あたらし生産能力を減退する事のないやう深く心すべきである。

吾等の遠き祖先の生活は純樸そのまゝであつた。しかし時の進運につれて所謂文化生活なるものが行はれ、冠婚葬祭その他社交儀禮の煩はしきを誇る風潮が次第と濃厚になり、古の純樸な姿を失ふに至つた。率直に用を表はし、簡明に事を處せんとするものを以て禮知らずとして之を斥け、純真朴直な農工庶民の心を害ふに至つた。これは丁度實力のないものが無暗と上べを飾り表面をつくろつて得たりとするに等しく、老いさらばうた女の厚化粧を見るやうなものである。後になつて外部からくつつけたくだくだしいものを斥け、人間本來の姿に歸れ。平易明快、純真素樸の生活こそ日本民族本來の相であり、交戦國民

の生活標語である。

明治天皇御製

かざらむと思はざりせばなか／＼にうるはしからむ人のこゝろは

第五 安 分

分に安んじ待遇所得に文句あるべからず

不平不満はスバイの付け入る本である。^(三八) 斷じて自己の待遇地位身分等について不足を云ふ勿れ。愚痴をこぼす勿れ。友人の誰それは月給がいくらになつた。自分はまたこれこれだと、人の身の上を羨むのは、はしたなき事である。自ら獨立して業を営む人々も亦自分の仕事の所得について彼これ云ふべきでない。辛勞ばかり多くて儲けが少いなどいふのは要するに愚かな愚痴である。一

時の運不運に眼がくらんで、妾りに自己の前途を嘆くは男子のすべき事ではない。

凡そ日本臣民たるものは、その與へられたる仕事についてたゞまつしでらに勤勉努力すべきである。自己の仕事は天の與ふるところであつて衣食の資をかせぐためのもではない。各自の仕事は、この國を富ましこの國を強からしめ、以て天壤無窮の皇運を扶翼するために、陛下から分ち與へられてゐるものである。昔人口も少く仕事も多くなかつた時代には夫々の家に定まつた仕事である。昔人口も少く仕事も多くなかつた時代には夫々の家に定まつた仕事である。昔人口も少く仕事も多くなかつた時代には夫々の家に定まつた仕事である。昔人口も少く仕事も多くなかつた時代には夫々の家に定まつた仕事である。昔人口も少く仕事も多くなかつた時代には夫々の家に定まつた仕事である。

如く人口も殖え仕事の數も數限りなく複雑になつて來たために、役人の外一々陛下からぢかに仕事を授かるわけには行かなくなつたが、しかし職分に對する人々の心掛に於ては少しも變ることはない。即ち自己の職責を全うして皇運を扶翼するのであつて、このことを職域奉公(三九)と言ふ。既に奉公である以上、所得収入の多少を論じ、勞苦の難易をかこつべきではない。たゞ一心に職責をつくし、仕事の出來榮を樂みとするがよい。誰しも仕事がよく出來た時には眞からたのしいものである。

凡そ人間の慾望ほど限りないものはない。一を得れば十を望み、十を得れば百を得んことを希ふ。満たさるれば満たさるゝほど慾は大きくなつて來て果てしがない。この果てしない慾に追はれて、自己の所得に不足不滿をいふのは、水に寫つた月を追ふて之れを捕へようとあせるに等しい。いかに一生あくそく

しても之を捕ふることはできない。結局慾望のために精根を使ひ果たして不幸な生を終るのが落ちである。

徳川家康はこのことを子孫に戒め「人の一生は重き荷を負ひて遠き道を行くが如し、急ぐべからず。不自由を常と思へば不足なし。心に望み起らば困窮したる時を思ひ出すべし。堪忍は無事長久の基。怒を敵と思へ云々」といつた。然り萬事不自由を常と思へば何の不足もない。今や吾等は世界最大の英米を相手として長期の戦を戦つてゐる。不自由は當然の事である。この事をわきまへず不平不満を訴ふるならば、スパイの手さきであるといはれても仕方がない。吾等の祖先は久しく「足るを知つて分に安んずる」生活を送つて來た。與へられたるものに満足して、身分相應の生活をしてさへ居れば斷じて不足あるわけはない。身分不相應の家に住み、身分不相應の衣類を着、身分不相應の樂み

に耽らうとするから不足が生ずる。

子女の教育にしても、たゞ世間態に引きずられて妄りに上級學校にすゝませようとするから、生活にも破綻を生じ、自己の所得にも文句をいひたくなつて來るのである。

こと足ればたるにまかせて事足らず足らずで事たる身こそ安けれ

過ぎたるを望まず、^(四〇)分に安んじて一念仕事に精進すべし、これ眞の御奉公である。

明治天皇御製

おもふこと思ふがまゝになれりとも身を慎まむことな忘れそ

世の中はたかきいやしきほどく身に盡すこそつとめなりけれ

明朗瀾達常に微笑を以つて人に接すべし

帝國は現在（昭和十七年七月七日）既に五千萬平方キロの戦面を確實に領有して、大東亞新建設に着手すると共に、必勝萬全の基礎的態勢を具へつゝあり、米英の非道なる勢力を大東亞の聖域より驅逐掃蕩し、完全なる主動權を掌握するに至つたのであつて、いよ／＼十億の大衆を救ひあげようといふのであるから、物資の不足も、仕事の繁忙も當然の事であり、笑つてこれを切り抜けることが大國民の襟度である。にも拘はらず今日至る處で見る光景は必ずしも明朗とは云へない。乗物の混亂に、店頭の行列に、窓口の繁忙に、人も吾れも聲をからし奔命につかれ、勢ひ尖つた言葉や、しぶい顔をしたくなるのであら

う。しかし乍らこの難局を欣然として打開して行かなくては、大東亞十億民衆の指導者たる資格がない。

明朗瀾達、さ乍ら、から竹を破つたやうなわだかまりのない心地で、いつもニコニコして人に接するには、凡そ次のやうな心掛が必要である。

- 一、我利私慾をすて、専ら皇運扶翼のために奉公すること
- 一、公明正大心中一點のやましいこともないこと
- 一、人の喜びを以て自分の喜びとすること
- 一、身體健全なること

いかに忙しい仕事でも、それが皇運扶翼への途であると思へば氣持も自らゆつたりとして來よう。私利私慾をすて人のために奉公することを以て樂みとすれば、不平も不満もあるものではない。況んや人の喜ぶさまを見て自ら喜ぶ境

地になつたならば、人に親切をつくすことだけが何よりの楽しみとなるのである。或は云ふであらう。それは聖人君子でなくては出来ないことである。然し戦線を思へ、戦陣の勇士たちは何れもみなこのやうな心がけを以て命さへ投げだしてゐるではないか。今は銃後と雖も戦線と等しくこの心掛なくてはならない時である。一度この心境になりさへすれば心自ら朗らかに、微笑は作らずして浮ぶものである。現に人々はさうした模範的な商人や、乗務員や、官公吏の幾人かを知つてゐる筈だ。それらの人々に接するときに、吾々は恰も沙漠の中でオアシスに巡りあつたやうな嬉しさを感ずるものがある。さうしてこのオアシスはすべての人々の心の中に埋れてゐる。各自はみな一様に自らの心の中からこのオアシスを掘り出さなくてはならぬ。

おゝ友達！ 明日も亦笑顔で會はうよ！

かういふ新聞記事を見た人があらう。何とほゝゑましい情景ではないか。……退け時の有楽町の驛、氣せはしい勤人がフト足を止めた。改札口にも待合室にも桔梗、女郎花など、色とりどりの秋の花が美しく咲いてゐる。驛長が乗客に貰つた花を、ビール瓶にさしてフォームに飾つたのは数日前のことだつた。これが思はぬ反響を呼んで、朝夕の混雑時に神経をイラ／＼させる乗客も一電車やりすす位の豊かな氣持になり、季節々々の花を持つて来る客はそれから益々ふえ、花瓶を持つて来る人、花臺を持つて来る人もゐた。これを記帳してその親切をとどめてゐるといふ。花に結ばれた美しい人情である……。

明治天皇御製

あさみどり澄みわたたりたる大空の廣きをおのが心ともかな

さしのぼる朝日のごとくさわやかにたまほしきは心なりけり

基本訓 その二

第一簡素

身邊無用の物をまとはず飲食にこごと言ふべからず

質實剛健は戦時國民生活に於ける絶對的要件である。吾等は吾等の生活から一切の無駄を排除しなくてはならぬ。まづ身の廻りから無用の物を取り去ることだ。晴れた日のレンコートや、學生の襟巻は、見るも不愉快なもの、詰襟服の下にワイシャツをまとふなど寧ろ滑稽である。青壯年剛毅の士は寒中なほ外套も著す、帽子もかぶらず、手袋も用ひぬ位の氣概あるべきものだ。ズボンの

裾の折返しや縫ひ付けのポケットを禁止するだけでも何十万着の洋服が出来
る。無用の長物を廢棄すればそれだけ必要な方面に廻つてくる。惡臭鼻をつく
ポマードでねり固めた長髪は言ふも更なり、女子も亦自然の美しさを害ふやう
なすべての紛飾を一掃しなくてはならぬ。所謂簡素の美とは無用のものを切り
すてた後に残る最も能率にとんだ實用的な美しさである。それは古來わが國に
於て最も早くから發達した美だ。伊勢神宮の建築を見よ。何一つ裝飾らしいも
ののないあの白木作りの美しさを。これこそ世界最高の美なりと西洋の美術
家さへ嘆稱した。(四四)あの美しさは吾等の最もよき手本である。ごたごたと多くの
ものをくつつけて美しとすることは西洋流の美の考へ方で、日本美は一つでも
數少なくするところに特長がある。日本の繪は墨一色で百千の色を表はしてゐ
る。(四五)無用の枝葉を切りすて、はつきりと活けるとところに活花の美しさがあるこ

とを知らなくてはならぬ。

西洋人の家に行つて見ると、室の中一ぱいにごてごてと繪や彫刻やいろんなものを飾りたてゝあるが、日本のお座敷にはゆつたりとした床の間に掛物と、活花とが一つ宛あるだけだ。澤山のを並べたてるのは、美しいと言ふよりも、俺は物持だ、何でも澤山持つてゐるぞと言ふことを誇るもので、これを所有美と言ふ。所有美は眞の美ではない。着物の模様にしても近頃は西洋流をまねて二めに大きな模様を染めだしたものもあるが、あんなものよりやはりあつさり裾にだけ染め出されたものの方がはるかに奥床しく美しい。簡素美はあつつましさにある。吾々は西洋かぶれの美の思想を清算して、昔乍らの日本美——即ち簡素美に立ち返らなくてはならない。

明治天皇御製

なか／＼にみやびすくなしあまりにも作りすぎたる庭のけしきは

食物についても亦同様の心掛が必要である。西洋流の栄養科學が多種多様の献立を産みだし、皿數の多いことを以て誇りとする風を馴致して來たが、吾々には昔から一汁一菜といふよい手本がある。空海陸に夥しい大軍を動かしてゐる今日、三度三度の食事に心に適ふものを求めようとするのはぜい澤の極みである。何でもあるもので間に合せ、出されたものを甘んじて食ふべきである。飲食のことに心奪はれ、或はことさらに機會を設けて宴會を催すなど交戦國民のなすべき事ではない。況んや料亭おでんや等にて飲み過しへどを吐いて大道に横はるが如き醜態をさらすに至つては言語道斷である。飲食はすべて腹八合を以て上乘とする。暴飲過食は病のもと、常に控へ目にして十分これを咀嚼するがよい。すべて飲食は口腹の慾を満たすがためにとるべきでなく、只だ活力

の根元を養ふためにとるものであることを知らなくてはならぬ。

杉浦重剛先生が子供の頃、父君と町を歩いて居られたが、魚屋の店頭に大きな蟹のあるのに目がとまり、「父上大きな蟹が……」と言はれた所、父君は「武士が食べ物に目をくると云ふことがあるか」といたく叱られた云ふことである。吾等の祖先は飲食に對して此の如き嚴格な考を以てゐたものである。(四六)

戦時生活に挺身せんとする熱血の士は、よろしく進んで次の諸項にまで邁進すべきだ。

- 一、時にあらざれば食はず。
- 一、儀禮の外酒を用ひず。
- 一、斷じて煙草をすはず。

なほ食時に於ける作法については一應の心得が必要である。殊に先輩長上と食事を共にする際の如き、古來わが國に傳はつた種々の作法があるが、今や全くそれらの作法もすたれ、たゞ禽獸の如くむさぼり食ふものが多いのは、大東亞の指導國民として恥づかしい事である。よろしく禮法書(四七)について修鍊すべきである。

第二 愛 資

物資を愛護し天物を空しうすべからず

凡そ天地の間に在るあらゆる物は、皆ことごとく靈を持つてゐるとするのが、日本人の物に對する考へ方だ。この考は伊邪那岐尊、伊邪那美尊が、天地を創造遊ばれた肇國の古から日本民族の間に強く植ゑつけられたものである。

即ち木も草も山も川も鳥も獸もすべてこれ伊邪那岐、伊邪那美二柱の神が、もろもろの神や大八島をお産みになつた後で、次々とお産みになつたものである。だから地上のあらゆるもの悉く神々の御子であり、吾々人間の同胞であるわけである。既に吾々の同胞である以上、心あるものとして之れを愛護することは人間の道である。

この考が人々の心にしみ渡つてゐたから、吾等の祖先は一粒の米にも三體の佛様が宿つて居られるなど、云つて、決してこれをおろそかにしなかつたものである。又茶道では茶の湯に用ふる茶匙とか茶碗とか夫々の器物を必ず袋に入れてから箱の中に大事に納つて置き、この袋のことを衣物と云ひ、箱を家といつてゐる。それは茶匙や茶碗にたましひがあり生きたものであると云ふ考があるからである。茶の湯の道具だけでなく、すべて日本人が物を大事にする習慣

をもつてゐる事は、物を入れる箱や袋がいろいろとある事でも分る。之に反し西洋人は一つの旅行鞆の中に泥のついた靴も洗面道具も食物もハンケチもごつちやに放りこんでゐると云ふ有様である。この西洋風が日本人にもうつて来て、どうかするとこの頃物を粗末にする風が見受けられる。役所の紙であるからといつて一行も書かない紙を反故にしたり、會社のものであるからといつて半分も使はぬ鉛筆をすてたり、學校のものであるからとてまだいくらかも使へる白墨を捨て、省みぬといつたやうな例は、一々數へきれないであらう。

西田天香氏の一燈園では、毎日附近の學校をまはつて硝子ふきを奉仕し、歸りに使ひすてゝある白墨を貰ひ集め、それで結構自分の學校の用をたし、一度だつて白墨を買つた事はないと云ふ。

すべて金さへあれば物はいくらでも買ふことが出来る。尊いものは金である

と云ふ考へ方は西洋の考へ方である。その考へ方が間違つてゐることは、今日の日本人にもよく分つたことと思ふ。いくら金があつても物がなければ買ふことは出来ない。尊いものは金でなく物である。戦前のことではあるがアメリカではせつかく收穫した綿を山と積んで焼きすてた事があり、海の水がにごる程珈琲を海中に放りこんだ事もある。あまり澤山あると綿や珈琲のねだんが下つて、商賣にならぬからだ。つまり綿や珈琲のねだんを高くするための手段なのである。天物をすてゝ顧みぬアメリカ人に「もつたいない」など云ふゆかし(四八)い心がある筈はない。日本人は断じてそのやうな真似をしてはならない。一粒の米も一枚の紙も、それが出来上る迄には凡てどの位多くの人の力と天の恵みとが注がれてゐる事であらう。天地のめぐみなくしては一本の草も生ひ立たず、人間の努力なくしては一粒の麥も口にすることは出来ない。この天地の恵

み人間の努力を思へば、たとへどんなさゝやかな物でも、断じて粗末にしてはならないわけだ。否々吾々はあらゆる天物に對して、常に之れに感謝の心を以て接しなくてはならぬ。所謂「物の恩」を忘れないこと、これが日本人の美風なのだ。

戦争はあらゆる物資を必要とする。鐵と石炭とガソリンだけが戦ひの物資ではない。ありとあらゆる物がどこかで戦争の役に立つてゐる。今日の戦争は物の戦だとさへ云はるゝ。物がなくては戦争は續けられないのだ。だが資源に制限があり勞力に限りがある以上物の生産にも限りがある。かくて吾々は既にあるものを大事に使つて、物の壽命を一日も長からしめなくてはならぬ。既に役に立たなくなつた物と雖も、決してこれを無駄にしてはならない。天地の間一物と雖も無用のものはない。役に立たなくなつたものも再び之れを活かして使

ふのが眞に物^(四九)を愛するの道だ。所謂廢品回収はそのために行はるゝ。鼻をかんだ反故紙さへ再び紙へなつて歸つて來る。臺所のちり芥さへもがガスとなり、肥料となり、豚の飼料となるではないか。

明治天皇御製

山田もるしづが心はやすからじ種おろすより刈りあぐるまで

第三 創造

常に研究怠らず創造發明に努むべし

日本は世界に誇るべきくさぐさの勝れたものを持つてゐる。國體の優秀尊嚴な事は云ふ迄もない。國民の性格に於ても歐米人のまねする事も出來ない幾多の美點長所を持つてゐる。たゞ明治以降一時西洋にかぶれたためその優秀なも

のゝ存在を忘れてゐただけである。今や吾々はその忘れてゐたもの呼び戻さなくてはならぬ。けれどもたゞ古いもの呼び返しただけでは、彼等に打ち勝つ事は出來ぬ。古いもの呼びさましそれをもとし、更にその上に新たな創造を加へて行かなくてはならぬ。吾々の日常生活は元より、國防産業のあらゆる方面に於て、今日以上の優秀なるものを創り出す努力^(五〇)が必要である。

日本人は科學の研究に於ては歐米人に及ばず、物質文化は西洋の方が進んでゐると云ふ見方は誤つてゐる。日本人の頭腦は斷じて歐米人に劣るものではない。吾等の祖先がいかに多くの科學的發明をしてゐるか三四の例をあげてみよう。

薩摩の島津齊彬公はいち早く電氣地雷火を發明された。電話機を發明したのも廣瀬自懿といふ日本人だ。無線電話は明治四十五年にわが鳥瀉右一博士が發

明した。平賀源内は寫眞機の發明に先立つ六十六年前既に半寫眞機と云ふものを工夫してゐるし、國友藤兵衛は二十連發の空氣銃を發明し、岩田平四郎は明治七年に既に空中飛翔機の論文を發表してゐる。講談や映畫でよくみる忍術にしても、日本人が既にあの頃から毒ガスを使つてゐた證據だと見られる。

凡そこのやうな例は明治以降に於ても澤山あるが、西洋かぶれのしてゐた當時の人々が、日本人の作つたのはつまらないと思ひこみ、之れを用ひなかつただけだ。

このやうに吾々の頭は科學的にも優秀である。この優秀な頭を以て吾々の生活をよりよくし、吾々の産業を高め、吾々の國防を強大にすることを工夫しなければならぬ。さういふことは學者のする事だなど云つてはいけない。あらゆる職場あらゆる家庭に於て、一人一人が皆自分の携はつてゐる事について研

究工夫しなければならぬ。いかにしたらもつと家の中が住みよくなるか。物の置き場所を工夫し、電燈の下げる所を考へ、御飯の炊き方炊事の仕方にも心を用ひ、今より以上經濟で手間が省ける途を創り出さなくてはならぬ。與へられた材料をいかにうまく料理するかは女子の研究工夫による。石鹼の缺乏をどうして補つたらよいか、どうしたら石鹼を使はず奇麗に洗濯が出来るかなど、一家の生活内にも研究工夫をこらすことは山ほどある。

職場に於ては更に多くの研究を要するものがあらう。毎日毎日同じ事を同じやうにくり返すだけでは進歩はない。毎日同一の仕事を反覆する間に、自然とあつたらかうしたらと仕事の改良に對する希望がわくであらう。その希望を實現するやうに努力しなくてはならぬ。そしてその事は必ずしもむづかしい學問の力がなくても多年の經驗によつて出来るものである。

昭和十六年科學動員協會は産業戰士の職場に於ける研究を募集したのであつたが、その結果は無名の人々の間から多くの優れた發明を見出した。新潟鐵道局の關根鶴吉氏は鐵を一片も使はないでブレーキを作ることを見出し、鐵の足りない戰時日本の運輸界に大きな貢獻をされた。この發明は氏が毎日自分の職業でさる汽車の検査をやり乍ら、いつも心にかけてゐて長い間苦心さへた結果出來上つたものである。

自分の家庭生活を科學的に改良し、又自分の従事してゐる産業を科學化して行くことは、實に銃後國民が擧つて志すべき大きな日常のつとめである。これは斷じて學者や専門家にのみ任すべき事ではない。そのためにはまたつとめて讀書修養を志す事が必要であらう。毎日必ず何十分かの時間をさき、何頁かの本をよむことは、これまた大東亞の指導者たるべき吾々の缺くべからざる事である。

あるが、一日三十分の讀書でも毎日続けることは中々むづかしい。

「折々に遊ぶいとまはあるものゝいとまなしとて書よまぬかな」これが人間の常である。忙しい生活の中からまづ讀書の時間をさいて之に充つるがよい。

明治天皇

よく人を導くまではあらずとも進まむ時におくれざらなむ

第四 孝 養

父母を敬ひ老を先にし以て子弟の模範たるべし

孝は百行の本なり。いかに立身出世しても親に對して孝養怠る時は、人として尊敬するに足らず、たとひ貧しき一生を終るとも、孝心深き人は萬代の鑑として尊信せらるゝものである。人としての道はまづ孝より初まる。父母の心を

心とし、専らその教に従ひ、その命を守り、その望みを適へしめなくてはならぬ。云ふまでもなくわが身のこの世にあるは父母のたまはせしがためである。父母ありてこそわれあるを思ひ、遠く離れてゐます時は常に音信怠らず、四時をりをりに心こめた贈りものをなすべく、共に家にゐます時は、朝夕これをいたはり、その好めるものを進め、その喜びを以て己れの喜びとすべきだ。

由來わが國民は孝心あつき國民として知られ、孝養美談の傳はるもの數知らず、雪中に筈を探した孝子や養老の瀧の話は人の汎く知るところである。今次戦線の華と散つた勇士の悉くが、陛下の萬歳を叫ぶと共にその母を呼ぶのは母の力の強大と共に、日本人の孝心深きを語るものである。孝道尙すたれずして國民を導いてゐるところに、皇軍の強さがあるわけである。

然し乍ら近年歐米の風俗を模倣し、親と同居する事を壓ふもの次第に増加

し、子に厚くして親をうとんするもの少くないのは遺憾の極みである。父母、祖父母共に一家の中に在つて、長幼その序に従ふはわが家族制度の一大特色があつて、これあるがために吾等の生活は全體主義の最もよき標本とされる。然るを好んで親と別れ、老をうとんするはこの美風を破壊するものである。止むを得ずして別居する場合は、つとめて近くに住み、朝夕の挨拶を怠らず、常に之れを迎へてその教へを受くべきである。忙しい仕事に追はれ、そのいとまなき人々も、心をこゝに留めて仕事にいそしむべし。

明治天皇の御製に

いとまなき世にはたつともたらちねの親につかふる道な忘れそ

と仰せ給ひしは、吾々の常に奉誦、心に銘すべき御訓である。

孝養は敬と愛とよりなる。年老いて氣力衰へたる人々は、身心ともに幼子と

等しく克己力も自制力も乏しくなるものであるから、之れを敬ふと共に幼子に對するが如く之れをいたはりつくしまなくてはならぬ。元氣盛な自分の心を以て親を律してはならない。

孝養以て親に對する心を押し廣めて、社會生活のあらゆる場合に及ぼすことは、最も望ましい社會道德である。乗物の中で老人に席を譲るが如きは云ふ迄もない。諸事老人を先に立て、先輩の後に従ふ事はこの社會に美しい秩序を打ちたつる所以である。地位官等のみを以て人間の高下を定めず、長幼序に従ふ事を忘れてはならない。

幼少子女を愛撫する事も亦久しく日本の美風として推稱さるゝところであるが、その度を過ぎ、子供を自由放埒に任せ、その一生を誤まらしむるが如きは深く心すべき事である。

近年國民の教育熱漸く高まり、人々競ふてその子を上級學校に進ましむるは喜ぶべき事であるが、教育を以て立身出世のための投資の如く考へ、子の出世によつて己が老後の悦樂を豫定するが如きは誤れるの甚しいものである。子供は自分一人の子供でなく、陛下の大御寶であること(五二)を忘れてはならない。

されば子女教育の要は、自ら孝道を實踐し以て正しき國民の道を眼のあたり見せる事である。この活ける模範によつてのみ子女は良き皇民となることが出来る。單なる愛撫は決して大御寶を正しく導く途ではない事を知らなくてはならぬ。

明治天皇御製

をしへある庭にさきたる撫子の花は露にもみだれざりけり

隣保互に扶け親和協同の實をあぐべし

日本は家族的國家である。^(五三)一つの國が一つの家を押し廣めたもので、七千萬の國民は 天皇を家長と仰ぎ同じ家の下に住む同胞である。即ち同じ祖先の血をわけたもの同士であるが故に、これを同胞と云ふ。同胞は 天皇を中心にしてたゞ一つにならなくてはならぬ。榮えに榮え擴がつて例へ幾億の民にならうとも、もとをたゞせば只だ一條であるところに、わが國の優れた成立ちがある。今も尙地方の部落には、一村縁續きになつてゐるところが少くない。たとへ近い縁續きでなくとも、一つの部落一つの村は、つながりつながつて一かたまりになつてゐる。所謂郷土といふものがはつきりと存在し、同じ社の神さまを

中心にして一つ心になつてゐる。維新後になつても長い間各の郷土はがつちりと手を組んで、苦樂を共にして來た。一つの村から罪人が出れば村人こぞつてこれを恥とし、村人の一人がほまれをあぐれば、村人總ての名譽として來た。村の一家に災難があれば總ての村人が寄つてこれを救ひ、貧しい人には食を分ち、勞力の足りない家には力をすけて、殆んど全村一家のやうな生活を續けて來たものである。

さらに維新前にさかのぼると、五人組とか十人組とか云ふ制度があつて、各組に組長があり萬事組長の指圖に従ひ力を協せて來た。組内に罪を犯すものがあれば、組長自らこの責を負はなくてはならなかつた。かくて幾つかの五人組が一つの部落をなし、いくつかの部落が一つの村となり、村が集つて郷となり、郡となり、國となつて日本を形作つてゐたものである。

この成り立ちが壊れて今日のやうになつたのもやはり西洋の經濟組織が深くしみこんで來たため、國民は次第に郷土を失ひ、村人と別れ、はては家族とさへも離れ離れになるやうになつて了ひ、新に大きな商工都市があちこちに出現した。この大都市の人々は諸々方々からの寄り集りであるから、お互にその祖先も知らず、その家柄も分らず、互に威張あつて隣にゐても物も云はず、顔も知らぬと云ふ有様、西洋のまねをして家には高い塀を廻らし、戸には鍵をかけ、あだかも城廓の如く自分の家を守りその中にたてこもるやうになつて來た。そして自分だけよければよいと云ふ個人主義が日一日とはびこつて、他人の失敗を自分の成功のやうに喜ぶ人さへ日ましに殖えて來たものである。これでよいであらうか。このやうな姿で果して大東亞戦争に勝ちぬく事が出来るであらうか。

千萬の民の力をあつめなばいかなる業も成らむと思ふ

とは 明治天皇御製であるが、割據主義をやめなければ國民の力が集りにくいであらう。御訓にそはしないで申わけない事ではなからうか。

隣保班や部落常會や隣組の制度が、俄にとりあげられ、既に全國津々浦々にまで、かつて吾等の祖先が行つて來た美しい隣保互助協力の生活が、復活して來たのは、むしろ遅すぎた位である。

(五四)

既に形は出來上つた。そして着々と協力の實は上りつゝある。防空の活躍、軍事の援護を初めとし、物資の配給、廢品回収、貯蓄の奨励、防諜の協力等々いろいろの活動を通して國民は今まさに一つ心になりつゝある。この上にも望むところは仕様事なしのお務めに協力するのではなく、眞に心から扶け合ひ睦み合ふことである。教育の高下や僅か許りの富の大小にこだはつて城壁を設ける

が如きは、一億一心に龜裂をつくる基、不忠のそしりを受けても返す言葉はないわけである。お互に門戸を開き胸襟を開き、心安く出入して行くがよい。遠い親類よりも近い他人と云ふ事がある。向三軒兩隣、一本の大根も分け合つて食ふ位になつて初めて、祖先に恥ぢないと云へよう。

明治天皇御製

植ゑざりし我が垣根にも咲き出で、花はへだてぬ宿の朝かほ

さしなみのとなりの人をたのみにてひとりや老が庵にすむらむ

第六 愛 汗

毎日必ず汗を流し以て旺盛なる活力を養ふべし

流汗は全身の老廢物を一掃し血液の循環を活潑ならしむるを以て最もよき身

心の清淨法であり、最も簡易な健康増進法である。戦時生活に挺身せんとするものは、必ずまづ日に一回の流汗鍛錬をやつて、身心の爽快を満喫すると共に活力の源泉に培ふことを怠つてはならない。酷熱のために自然に流れ出づる汗でも悪い事はないが、自ら肉體を勞して流す汗の尊さには及ばない。肉體の烈しい活躍にはそれにふさはしい精神の緊張が伴ふからである。常に肉體を驅使する職業にある人々は自然流汗の機會も多いであらうが、専ら室内の事務に従ふ人々は額に汗する事さへ減多にないであらう。それらの人々は積極的に流汗鍛錬の機會を作るべきだ。その法は各自の生活と境遇によつて多種多様である。水汲み洒掃等家庭の雑務を處理して發汗するもよく、鍬をとつて空地を耕すも一策である。體操駢足の如き體鍊によるもよく、スポーツ、武道の修鍊又可なりである。その何れの法たるを問はない。適當な時間を選び連日これを續

行すれば、身體健在にして心氣明朗常に活潑なる活力を産み出す基とならう。
近時日本國民の體位頗る低下し、吸呼器や消化機能を犯さるゝものその數を知らず、殊に青年子女に其の夥しきを見るのは、交戦國として眞に憂慮に堪へない。云ふ迄もなく日本は今何程あつても足れりとしな程生産勞力を必要とし、無限の兵力を要求してゐる。その勞力とその兵力とは一に國民それ自らによつて供給する外はない。そのためには病氣のためにお役に立たぬといふ人をなくしなければならぬ。

活力の根源は單に流汗の一事のみではなく、榮養と休養と相待つべきであるが、この兩者は勸めなくとも人に皆求むるものであるから、銃後國民の修養としては、特に流汗の一事を強調する所以である。

肉體の勞働を以て賤しいものゝ如く考へ、手足を勞する事を以て下賤のもの

のする事であると思ふものは今日既に數少いであらうが、率先流汗の繼續的實踐に移り得る人も亦さう多くはなからう。これは極めて簡易な事であつて然も中々容易な行ひではない。切に青壯年氣銳の士の奮起を望む所以も亦こゝに存するのである。

明治天皇御製

ことしあらば軍のみちにとむ身は野をも山をもふみならさなむ
事しあらば火にも水にもいりなむと思ふがやがてやまとだましひ

結 盟

以上各項は悉く現下銃後生活に於て實踐最も急を要するものであり、然も最も缺除せる事柄である。何故に之を實踐し得ないか。何故にまた實踐しなければならぬのであるか。吾等はその理論に就ては既に一應の理解を得た。今はたゞ一の實行あるのみである。然りこの皇國未曾有の難局を打開し、大敵英米蔣を屈服せしめ、八紘爲宇の大理想を顯現せんには、まつしぐらにたゞ如上の條項を實踐すべきである。

三篇十五條、何れを重しとし何れを輕しとするに非らず。たゞ絶対訓三個條は一億國民一人も残らず今直ちに之れを實踐しなければならぬ絶対的のものであり、基本訓その一は主として社會職域に於ける實踐條項をあげ、職域奉公の

具體策を示したものであり、基本訓その二は専ら家庭を中心として萬人等しく實踐すべき個人としての大道を約説したものである。今一舉にしてすべての事項の完全な實踐を要望するのではない。人々各その境遇に考へて、まづ絶対訓を實踐し、次で基本訓その一に及ぶがよい。恐らく基本訓その一は最も至難の行であらう。これを突破する事を得たならば基本訓その二は一舉にして之れを貫くことが出來よう。

敢て全國の忠誠なる憂國の同胞に訴ふ。天地神明に誓つて挺身銃後生活の模範たれ、小さき我を殺して全き大我に歸一し、以て殉國の棄石たれ。

皇威萬邦を光被せん。

合 掌

戰時生活訓・註釋

〔一〕 大東亞戰爭が戦はれねばならない理由は炳として宣戰の大詔に明かである。また日本國民が現在總力を擧げて戦ひつゝあるところのものが大東亞戰爭である。

大東亞戰爭には沿革がある。昭和十二年七月七日北支に戦端が開かれるや、十一日の閣議によつてそれは北支事變と名づけられた。事變は擴大し、同年九月二日には臨時閣議において支那事變と呼稱することに決定した。かくして昨年十二月八日米英に對する宣戰となるや十二日の閣議は、支那事變を含むところの大東亞戰爭の呼稱を決したのである。以上は呼稱の沿革である。戰爭そのものの本質的沿革は如何、左様なものはないのだ。米英の干涉壓迫に對する東亞の安定を念とする日本帝國の反撥は、昭和十二年七月より今日に至るまで終始一貫わが武的活動を支配して來たところのものであつて、未だかつて變動したことがない。然らば戰爭規模の變遷はどうか、この點では大に變遷があつた。北支事變の時代において

は、戰闘區域は北支に限られた。支那事變の時代に入つても戰闘區域は永く支那の領内およびその近海に限られたが、後期に至つて我が武的活動は、支那の領土外に溢れる勢ひとなつた。大東亞戰爭となつて戰闘區域は一舉に無限大となつた。こゝで我々は考へなければならぬ。大東亞戰爭に至るまでは、我が國の目的とするところ、それを達成するための手段であるところの戰闘とは、地域的にいつて大體並行することが出來た。然るに大東亞戰爭に至つて事情は一變した。東亞が大東亞に延びたにせよ、我が國の目的とするところは要するにアジアの一部分に存するのだが、そのための手段は米英を相手に、世界至るところにおいて行はねばならぬことになつたのである。かくの如きことをいひ出すのは、一見變であるかも知れないが、大東亞戰爭の前と後とは非常な相違があるのである。北支事變が北支で收束され、支那事變が支那で收束されたならば、それで事變は濟んだであらうが大東亞戰爭に至つては米英等の勢力を大東亞から掃蕩した今日といへども、終熄を見ないどころか、寧ろ決戦はこれからであるといふ點に大なる相違を見るのである。

かくて大東亞戰爭は長期戰を戦つて、戦ひ勝たなければならぬこと言ふまでもない。

〔二〕 大本營陸軍報導部長谷萩那華雄大佐は、九月卅日午後五時から水戸市茨城會館において軍事講演を行ひ、銃後強化の必要を力説した、講演要旨左の通り。

「米國は一九四四年、即ち昭和十九年末までに軍備の大擴張を終つて日本に對し一大攻勢に出ようとしてゐる。即ち一九四四年末には陸軍兵力において四百萬、第一線の飛行機が二萬、海軍兵力においては艦艇二百六十萬トン、第一線の飛行機が一萬五千機、これを完成して大攻勢に轉じようとするものであつて、この準備期間中は飛行機並に潜水艦等による消耗戰略をもつて日本の國力を少しでも減退させようと努めてゐるのである。」

大東亞戰爭勃發前においては米國の戰略思想は戰艦中心主義、いはゆる巨砲巨艦主義であつたが、ハワイ眞珠灣やマレー沖において航空機の威力といふものが更めて痛感された。これにおいて戰艦主義を一擲し航空母艦の建造を急ぎ戰前現有七隻、建造中十三隻を取り急いで進水就役せしめんと計畫し、かつ空母八十五隻といふ海軍擴張案を可決した。珊瑚海、ミッドウェー、第二次ソロモンの各海戦はすべてかくのごとき戰略思想下に行はれたが、これらの戦ひで彼等は空母の損害が莫大で特に陸上基地のあるところに航空母艦中心の艦隊を進め

ることが非常に不利であることを知つた。こゝにおいて米國は不沈空母即ち陸上基地の建設に躍起となり、北はアリューシャンからミッドウェー、ハワイ群島並に西南太平洋のソロモン群島及びニューギニヤ島を連ねる線上に、陸上飛行基地を建設すべく晝夜兼行で努力してゐる。

ところが陸上基地は動かすことが出来ない。そこで彼等は航続時間が長く遠距離を飛行し得るやうな超重爆撃機の建造へと創意工夫をこらしてゐる。最近の情報によれば濠洲のブリズベーンから米西岸のサンフランシスコまで一萬二千キロを三十六時間と十分で無着陸飛行に成功したことを報じてゐる。これが眞實とすればミッドウェー東京間が八千餘キロ、アリューシャン東京間が八千八百キロなることは大いに警戒を要する次第である。また米國では既に空中航空母艦も現れてゐる。

次に米潜水艦のゲリラ戦であるが、米國は今非常なスピードで潜水艦を建造してゐるが、これが現れて來ることになれば現在より以上に日本の船舶は襲撃を受けるので決して樂觀は許されない。

要するにこの大東亞戦争といふものは全くこれからである。今まで米國は本腰ではなかつた。これから初めてほんたうの戦争らしい氣持で戦争準備に向はうといふのである。ところが日本では戦争は峠を越した、米國くみしやすしといふやうな現象を呈してゐる、米國に對し日本は武力戦においては絶對の確信を有するものである。思想戦、經濟戦にも絶對勝ち抜かねばならぬ。經濟戦に勝つためには先づ増産であり他の一つは貯蓄である。思想戦は最も大切なことで、第一次歐洲大戰において獨が戰鬪に勝つて戦争に負けたのは國內の道德の頽廢、思想惡化の結果である。日本國內において國民の道德が低下し國民の思想が惡化したならば如何に陸海空軍が國外の戰場において赫々たる戰果を収めても、その戰果は不利になるのである。」

〔三〕 決戦生活訓に曰く、「1、強くあれ、必勝の信念もつて職域を守れ。2、家庭も戰陣、生活を擧げて御奉公の誠をつくせ。3、國土防衛は協力一致、隣組の力で持場を固めよ。4、流言に惑ふな、當局の指示を信賴して行動せよ。5、國運を賭しての戦だ、沈着平靜、最後まで頑張れ。」

〔四〕 足利高氏がゐた頃、京都の醫者に坂十佛と云ふ人があつた。この人が紀元二〇〇二年にはるばる京都から歩いて伊勢にお参りをした。その時の事を書いた本に「大神宮参詣記」と云ふのがあつた。その本の中に次の文句がある。

就中當宮参詣、ふかき習は、念珠をもとらず、幣帛をもさしげずして、心にいのる所なきを内清淨と云ふ。潮をかき水をあびて、身にけがれたる所なきを外清淨といへり。内外清淨になりぬれば、神の心と我心と隔なし。既に神明に同じならば、何を望みてか祈請の心あるべきや。

〔五〕 △二宮尊徳の報徳訓に曰く、

父母の根元は天地の令命に在り
身體の根元は父母の生育に在り
子孫の相續は夫婦の丹精に在り
父母の富貴は祖先の勤功に在り
吾身の富貴は父母の積善に在り

子孫の富貴は自己の勤勞に在り
身命の長養は衣食住の三に在り
衣食住の三は田畑山林に在り
田畑山林は在人民の勤耕に在り
今年の衣食は今年の産業に在り
來年の衣食は今年の艱難に在り
年々歳々報徳忘るべからず

△我國で一番古い書物である古事記によると此の世の中にあるものは山川草木風火悉く神が産み成されたものであると書いてある。

〔六〕 獨逸の哲學者フオエルエバツハ神を否認して曰く「一體神と云ふものは人間の想像によつて作り出されたもので、眞にこの世にあるものではない。神は人間の外にあるものではなく、人間の中即ち自分の中に在る。若しここに氣が付いたならば、人は神を信じないで自分を信するが好い」と。

〔七〕 西洋では天にましますエホバの神といつて、神様と云へばその外にない。支那では天即ち神である。ところが日本の神様はいふ迄もなく天照太神である。天照太神は神であらせられると同時に、人であらせられた。日本を作り、日本を治めになつた方である。人格と神格とを併せ有せらるゝのが日本の神で、外國の神は實在の神ではない。

〔八〕 △我國の天皇は代々天照大神の御子孫であらせられる。即ち神の御末である。それで、天皇の御位に即かれるとその時から神様におなりになる。これは自分から神におなりになるので、人がするのでもなく、自然に神の御力によつて神におなりになるのである。現に人であつて神であられるから現人神と云ふ。その事は日本の古い本に澤山出てゐる。萬葉集にある歌の中には度々その事が歌つてある。

△「大君は神にしませば天雲のいかづちの上に庵するかも」と云ふ人麿の歌は、天皇が雷岳に行幸遊ばされた時に歌つたものであるが、天皇は神さまでいらつしやいますから、雲の上雷さんの上にかり庵を定められたのだと云ふのである。

〔九〕 神皇正統記は北畠親房が書いた本で、南朝が正しい天皇のおちすじであることを説

いたものである。この本の初に「大日本は神國なり。天祖始めて基を開き、日神長く統を傳へ給ふ。我國のみ此の事有り。異朝には其の類無し。此の故に神國といふなり。」とある。わが國體の萬世一系萬邦無比であることをはつきりと書いて、國民の向ふところを知らせた最初の本である。

〔一〇〕 本間家の家憲の中に信仰に言及してゐるものがある。曰く、

- 一、忠君愛國は君臣の本分なり、義勇以て公に奉じ、一旦緩急あれば家を顧みずして國家の爲に盡くせ。
- 二、神を敬ひ佛を崇ぶは誠心誠意を喚起する所以なり。一日も信仰の念を忽せにすべからず。
- 三、公共事業に全力を竭し公益のためには財を吝む勿れ。
- 四、貧を憫み弱きを扶け盛んに陰徳を施すべし。
- 五、勤儉の二字は祖先以來の嚴訓たり、宜しく服膺してその功德を發揮せよ。
- 六、深く子弟の教育に注意し忠孝の心を涵養すべし。
- 七、富豪の者と縁組すべからず、すべからず清素なる家庭の子女と婚を結ぶべし。

八、世態人情を究め、心身を修養するは一家を治むるにおいて必要なる事に屬す。宗家の嗣子たる者必ず全國を漫遊すべし。

九、祖先を尊ぶは我が國風の美たる所以なり、一家におけるもまたしかり、故に一家の大事は必ず祖先に奉告し、しかして後に決行せよ。

十、家庭の清肅は長幼の序を嚴にするにあり、決して紊ることあるべからず。

十一、勸懲の制を設け農事を奨励し小作を優遇すべし。

十二、額に汗して得たるものに非ざれば眞の財産ならず、須らく投機事業、會社事業を排斥せよ。

〔一一〕 わが國の社會は、初めに或る一族のものが、田畑を開き溝を作つてどこかに住むを定めると、その子孫がだんだん殖ゑて、その附近に分れ住み、遂に村を作るやうになつて出來たものである。だからその最初の祖先、即ちその部落の氏の上である方を氏神として祭り、村のものはみんなその氏の先祖の御恩を思ひ、永く之れを祭るやうになつたのである。だから何事につけても村の事は、その氏神様を中心にして行ふやうになつた。だから初めは

よそから移つて来た人があつても仲間になかつたものである。

〔一二〕 今は人が死ぬると墓に葬るが、大昔は死んだ人をその家に残して、残つたものが外に出て新しい家を作つた。これは死靈はどこにも行かないで永くその家に残ると信じてゐたからだ、この信念は今も尙残つてゐる。即ち先祖の靈は永くその家に残つて子孫の暮しを見守つて居られる。子孫がよく榮えるやうにとちやんと番をして居られる。然しこの靈は子孫が朝夕のお詣を怠つたり、時々のお供物を忘れてたりすると大變にごきげんが悪い。だから祖先への祭祀を怠つてはいけない。

〔一三〕 日本の家族制度は、曾祖父母、祖父母、父母、兄弟、子、孫とみんな一つの家に住み、尙遠い祖先の靈が祀つてあり、將來も亦長く子孫に傳へるものであるとされてゐる。だから家には家長といふものがあつて、家族は萬事家長の命に従はなくてはならぬ。家族には財産もなければ、何の権利もない。悉く家長の命によらずして勝手に行動する事は出来ない。家族制度では嫁を迎へる事は息子の嫁と云ふ意味でなく、家の後をつぐべきために迎へると云ふ事になつてゐる。

〔一四〕 彼岸會(ヒガンエ)は印度・支那にその跡を見ず、我國にのみ存する佛事である。

春分・秋分の日を中日(チュウニチ)として前後七日間行はれる。起原は詳かでないが彼岸とは佛教の理想たる涅槃の境地をいふので、平生穢れた人生生活を營めるものが、この日を期して止惡修養の時と定め、佛道を修行してその理想に近づくべきことを意味し、彼岸會と名づけたものである。盂蘭盆會(ウラボンエ)は略して盆會といふ。鬼處にあつて倒懸の苦を受けるものために設ける法會で、佛弟子目連(モクレン)が餓鬼道に陥れる母を救ふた故事により七月十五日に營む。この日寺社の境内に老若男女相集つて、盆踊をする習俗があるが、これこの法會によつて、亡者が地獄の苦患を免れて喜ぶ状を模したものといはれる。精靈會(シヤウリヤウエ)は魂祭ともいふ。もとは我が國固有の祖先を祭る風俗であつたが、先亡追善の爲に營む盂蘭盆會とその意義相似た所から、いつの間にか混淆されて、それと同一行事となつたもの。七月十三日より十六日までの間、冥途より来た亡靈を迎へて供養する。施餓鬼は施食會(セジキエ)ともいふ。惡趣に沈んで飢餓の苦に責められる衆生のために飲食を施す法會で、年忌・追善の佛事を營む際にこの儀式を行ふが、また一般に盂蘭盆に修する。

〔一五〕 村祭の折に神輿をかついで練り歩く時、かねて村の掟に逆いたり、協力しなかつたりした人の家に、誰いふとなくそのみこしをかつぎ込み、戸や窓や家具をぶつこわしたりする。これは神の命じ給ふところであるとされてゐた。一種の村人の制裁である。

〔一六〕 さきに述べた如く、個々の部落は、その祖先を同じくする一つの氏の集りであるから、血がつながり合つてゐる。そしてその部落の人たちによつて耕すに適當した田畑があるので、氏の違ふ他所の人が、移り住むことを歡ばない。殊に他所の部落で悪い事をして、そこに住めなくなつたものが、はいり込んで來ようとしても、それは受けつけなかつたものである。

〔一七〕 石川丈山の友人に小栗何某と云ふ武士があつた。ある年岡山に行く途中、京都の丈山の家立ちより、來年の十一月頃は歸るから、その時又寄らうと云つた。それでは十二月二十七日によつてほしい、御飯でもさしあげよう」と約束した。そして小栗はその日を約して岡山にたつた。その日になると前夜からの大雪をかきわけて小栗がやつて來た。おうよく來たと二人は朝飯を共にした。御馳走は柚味噌一くさであつたが、朝飯がすむと小栗は

まだ岡山の用事がすまないからと言ひ急いで岡山へ歸つて行つた。これは約束を果さんとしてたつた一くさの朝飯をよばるゝために、はるばる岡山から京都まで上つて來たのであつて、今の人から考へると馬鹿々々しい話かも知れぬが、然諾を重んずる武士かた氣がいかにも麗如としてゐる。

〔一八〕 茶の湯又は單にお茶とも云ふ。粉にした茶をたてゝ人に御馳走する習はしが織田豊臣の時代からはやつて來て、後にはお茶のたて方を初め、客のもてなし方などを一通り心得ることが、武家の婦人の務となつた。今日でも女子の修養法として茶の湯が用ひられてゐる。その茶の湯の會で人を呼ぶ時には、庭に打水して待つてゐる。そこで約束の時間に客が後れてくると、その打水が乾いて了つて、せつかくの苦心が分らない。主人の方では改めて又打水をしなければならぬ。そんな手数をかける事は失禮であるとして、茶の湯の會では必ず案内された時間の十五分前に到着する習慣にはつてゐて、今も嚴重に實行されてゐる。

〔一九〕 眞珠灣攻撃の特別攻撃隊に死を決して出動、あの偉大な功勞を残した軍神九柱。

海軍少佐	横山正治
同	古野繁實
海軍大尉	廣尾 彰
海軍特務少尉	横山 薫 範
同	佐々木直吉
海軍兵曹長	上田 定
同	片山 義 雄
同	稻垣 清

〔二〇〕葉隠の著書の大眼目は、四誓願を立てきつと之を履行するといふ事である。即ち其の四誓願といふのは、

- 第一、武士道に於て後れを取るまじき事。
- 第二、主君の御用に立つべき事。
- 第三、親に孝行すべき事。

第四、大慈悲を起し人の爲になるべき事。

である。この葉隠は鯨波禪の建設者鈴木正三の傳を受けた山本常朝といふ人の話を田代某が筆記したものである。鯨波禪といふのは戦場で鯨波をドツとあげて鎧の袖をかざして敵陣の中へ飛び込む時の氣合を坐禪に用ゐるので膽力養成の一法である。葉隠の武士道は全く此の鯨波禪からわり出したものと説く人がある。

〔二一〕△高田保馬博士の研究(貧亡論)。

△二官尊徳の遺著にも

「富貴なる人は飲食を多くし衣服足り、花美を盡し勤行すること少し。故に子孫少し。貧賤なる者は飲食少く衣服を缺き粗衣を着て多く勤勞するを以て子孫多し」とある。

〔二二〕聖徳太子がお作りになつた十七條憲法の第三條に次のやうにある。
 三に曰く、詔を承けては必ず謹め。君をば則ち天とし、臣をば則ち地とす。天覆ひ地載す。四時順行し、萬氣通ふことを得ん。地、天を覆はんと欲するときは、則ち壤るゝことを致さんのみ。是を以て君のたまふときは臣承り、上行ふときは下靡く。故に詔を承

けては必ず謹め。謹ますんば自ら敗れん。

とある。その中の言葉をとつて「詔書必謹」と云ふことがよく云はれてゐる。

〔二二〕 親鸞上人は眞宗(浄土眞宗とも云ふ)の開山である。眞宗は最も平民的な宗教として信者が非常に多い。こゝに引いた言葉は歎異抄といふ本の中に出てゐることで、上人が師匠の法然上人に絶対に随順であつた事を示すものとして有名な言葉である。

〔二四〕 萬葉集第十三卷柿本人麿の歌に「葦原のみづほの國は神ながら言あげせぬ國」とある。言あげとは、とやかく議論をせぬといふ意味である。

〔二五〕 △萬葉集は仁徳天皇の元年から淳仁天皇の天平寶字三年に至る四百四十六年間、四千四百九十六首 歌(長歌二六二首、短歌四一七三首其他)を集めた日本で一番古い歌の本で、作者は上は天皇より下は乞食、遊女に至り、地域も都を中心に全國に亘つてゐる。古事記と日本書記と萬葉集とは日本の昔の事を研究するに最もよい本である。その頃まだ假名がなかつたので、漢字を假名のやうにつかつてあるから、大變むづかしいが、今日は研究がすゝんで、普通の假名になほした本が澤山にできてゐる。

△山上憶良はその頃の有名な歌人で、憶良の作つた歌が澤山その中に出てゐる。

〔二六〕 徳川光圀が家中の士民に誨えたところは、日本の武士道を示して、大に味ふべきものである。曰く、

家中つねく懈らず、節義をたしなみ申すべく候。一言一行も士の道に於ては不僉議なる事これあるべからず候

節義の嗜と申すは、口に偽りを言はず、身に私を構えず、心すなほにして外に飾なく、作法亂れず、禮儀正しく、上に詔はず、下を憎まず、おのが約束を違へず、人の患難を見捨てず、甲斐々々しく頼母しく、假初にも下さまの賤しき物語悪口など詞の端にも出さず。

さて恥を知るを本とし、首を刎ねらるゝとも、己がすまじき事はせず、死すべき場合は一足も引かず、常に義理を重んじ、その心鐵石の如し。然も亦溫和慈愛にして物の哀れを知り、人になさけあるを節義の士とは申候。平生心掛なく、うか／＼と日を送り候は、誠に古人のいはゆる醉生夢死にて候はむや。と敍して居る。

〔二七〕文武天皇の慶雲元年粟田真人が唐に使した時、唐人が真人に向つて「しばしばきく、海東に大和の國あり、之を君子國と云ふ。人民豊樂にして禮儀厚く行はると。今使人を見るに儀容大に淨し。」と。即ち支那人も早くから日本人が禮儀の正しいのを感じて、之れを君子國といつてゐたのである。

〔二八〕民主主義のことをデモクラシイと云ふ。政治上で人民が人民のためにする政治のことを云ふ。天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず、萬人皆平等であるといふ考であるから、階級を認めず、上も下もない。従つて禮儀作法も重きをなさぬ事になる。アメリカはその代表的な國である。

〔二九〕楠正成の家訓に曰く、

- 一、禮厚くして、人の非を咎むるな。
- 一、天堂を願はんよりも、地府を作るな。
- 一、人の事いはんよりも、我が非をかへりみよ。
- 一、立身を思はんよりも、主恩を忘るゝな。

- 一、忠を安んじて、死を恐るゝな。
- 一、手柄だてせんよりも、下知に違ふな。
- 一、身のために身を害ふな。
- 一、我が命は主親のもの、わたくしに捨つるな。
- 一、金銀をためんよりは、借錢をするな。
- 一、酒は飲むとも飲まるゝな。
- 一、慈悲はするとも、かはりを取るな。
- 一、着物は寒くない程。
- 一、物書かば讀めるやうに。
- 一、學問は一生せよ。
- 一、弓矢は當てるが上手。
- 一、刀は切るゝが名作。
- 一、俗は家職を専らにして、後生を次にすべし。

一、僧は菩提を専らにして、世事を次にすべし。

一、足ることを知りて、及ばぬことを思ふな。

〔三〇〕 儒者中井履軒(享保十六年——文化十四年)は晩年明を失つたが、盲目となつた後も常に机の上に論語を開いて置いたので、ある人がそのわけを問ふた。

「勿論盲でも物が見ゆる道理はない。だが自分は目に見ることが出来なくても、聖經が机上に在ると思へば、自分の心に自ら警むる所がある。」
と答へたといふ。

〔三一〕 醍醐天皇の訓戒十二條に曰く、

一、酒を嗜む勿れ。

二、多言する勿れ。

三、自家の事を妄りに他人に語る勿れ。

四、好むで人の不善を説く者を避けよ。

五、甲乙隙あり、己れ乙と善ければ進退行止、眼を甲に注ぐべし。」

六、狂態の徒を友とする勿れ。

七、大いに怒ること勿れ。

八、恪謹篤厚にして慢逸の心を生ずること勿れ。

九、車駕衣服華美を競ふこと勿れ。

十、妄りに他人の物を借ること勿れ。已むを得ずして之を借らば日を限りて之を返すべし。」

十一、之を知るを知るとせよ、知らざるを知らずとせよ。

十二、人と對話する時他を見ること勿れ。

〔三二〕 雉子も泣かずに居れば、どこにゐるか分らるので獵師に見つかふ事もないが、ケンケンと高い聲を出してないので、すぐ見つかつて打たれる。人もだまつて居れば誤が少いが、しゃべるので失敗するといふ事を戒めた言葉。

〔三三〕 儒者太田錦城(明和二年——文政八年)が、初めて加賀から江戸に出て来た時のことである。彼は當時有名な碩儒山本北山の門を叩いて入塾を乞ふた。ところが北山は、「本塾では身元引受人がなくては入塾を許すことは出来ぬ」と言つた。「長りました」と錦城は

すぐそのまゝ郷里に歸り保證人をこしらへて、遙々と再び江戸に登りそして北山の門に入つたといふ。下宿してゐる家の主人に盲判を捺してもらつた間に合せの保證人を作りあげる當今の學生などに比し其の熱心さ驚くべきである。

〔三四〕元和元年五月八日、炎々と燃える大阪城を睨みながら、徳川頼宣(家康第十子)はぎり／＼齒を鳴らして言つてゐた。

「無念だ、後陣にばかり止められず先鋒でも仰せつけられれば、眞先に馳せて功名するものを。」

松平正綱がこれを見て、まだお年若であるから、後の機會は幾らもありませうから、と慰めると、頼宣はハツタと眼をいからして、

「馬鹿奴！ 十四歳の時が二度あるか！」とどなりつけた。これを耳にした細川忠興等の諸大名は、虎の子は、地に落つれば手を喰ふ氣ありと言ふが、末恐しやと怖氣を振つたといふ。二歳で水戸城に二十五萬石を領し、十八歳紀州和歌山に封ぜられて五十萬五十石を領した。徳川の親藩御三家の一。芦川十休が一人の士を極力推薦して、三度に及んだ時「十休、

よく心得ろ。人間中であまねく褒められる者と、あまねく憎まれざる者とは碌なものはない。憎まれてばかりゐる者は眞の悪人であり、褒められてばかりゐる者は阿諛迎合の輩だ。

悪人には憎まれ。善人には褒められる人間こそ本當の偉人なのだ。」と言ひ聞かせた。かういふ氣持を持つてゐた頼宣であつたから、あらゆる者に對する場合、非常にくだけた態度で接し、徒らに批評の是非に制せられたりする事なく、よく自らの眼を以て判斷し、俊傑偉才を續々拔擢登用した。

〔三五〕三代將軍家光は、勤儉を令しては、千代田城内の華飾を除かせ、文武を獎勵しては勲氣を蒙つてゐた阿部忠秋が隅田川の濁流を乗切るのを眺めて、これを許して老中にまで引立てた。又彼は頗る下情に通じ、訴訟のことなどに非常に心を用ゐて、老中等にも「下々にも解り易い言葉を使つた訊問せよ。」と命じ或時は、評定所から登場した若年寄が「聊かの金銀の訴へでございます。」と語るのを聞いて「天下の刑法を司る者が聊かとは何事だ。訴へた者の氣持になつて裁いてやつてこそ名判官ぢや。」と叱りつけた。かうして彼は寛永の治として後世に仰がれる燦々たる治績を残した。

〔三六〕 明治二十一年に日本に於て最初の博士が二十五人の碩學を選んで授與された。その中に理學博士を受けたものに山川健次郎があつた。理科大學長を経て明治三十四年我が國の最高學府たる東京帝國大學總長となつた。その後九州帝大の最初の總長となり再び東大の總長に轉じ併せて臨時ながら京都帝大總長を兼任した。樞密顧問官に親任され男爵をも賜つた。東大總長當時、總長の演説や訓示は何時もきまつて五分か十分といふ短いもので、一つの名物になつてゐた。

明治三十七八年の日露戰爭の時、我の教へを受けた工學士市川某といふ者が、志願兵として出征して戦死した。並々ならぬ勳功をたて、出身校であつた帝大に於ても恩師校友等が集つて追悼會を催した。彼も當然師の一人としてまた總長として追悼演説のために祭壇に立たねばならなかつた。靜かに進んで行つた。その色黒い顔は感動のために赤らみ、眼には涙が白く光るのが見えた。彼はまづ祭壇に一禮して徐ろに參列者一同に向つたが、突如感極まつて、絞るやうな聲を張り上げると匂々として自席に戻つてしまつた。その言葉は、

「市川君戦死す。國家のために惜しむべし、市川君のために慶すべし。」

とたつたそれだけであつた。だが、この朴直な言行の中に、彼の眞骨頂が餘すところなく發揮され盡してゐるのであつた。

〔三七〕 武田信玄の教訓に曰く、

心に物なき時は體泰かなり。

心に我慢ある時は愛敬を失ふ。

心に慾なき時は義理を行ふ。

心に驕なき時は人を敬ふ。

心に誤なき時は人を畏れず。

心に貧なき時は人に詔はず。

心に怒なき時は言葉知らかなり。

心に堪忍ある時は事を謝す。

心に曇なき時は靜かなり。

心に勇ある時は悔ゆることなし。

心に迷なき時は人を咎めず。

〔三八〕 戦時防諜十二訓（情報局編）に曰く、

- 一、必勝の信念を持ち如何なる事態にも動じないこと。
- 二、平時に於ける國民防諜心得を一層嚴重に遵守實行すること。
- 三、軍事行動、戦況等は當局發表以外に互り憶測の加はつた話などもしないこと。
- 四、應召者とその家族は言動に注意し、應召の場所、任地徵集年度等を洩さぬこと。
- 五、軍事列車、輸送船などの通過時刻を知つた場合は決してこれを洩さぬこと。
- 六、歸還軍人または出征將兵の家族は戦地の状況に關し特に言動を慎しむこと。
- 七、戦地への慰問文等には、内地の國防上の秘密事項と出征將兵に不安の感を與へるやうなことを書かぬこと。
- 八、海外への電信、電話、手紙等には、その内容に特別の注意を拂ふこと。
- 九、物資不足その他生活上の不平不満は一切いはぬこと。
- 一〇、外國または外國系其他發信人不明のものから宣傳圖書の配布を受けた場合には、速

かに當局に届出ること。

一一、外國より謀略の警戒には特に力を致し、自己の持場を嚴重に守ること。

一二、戦時には、在留敵國人は自由を制限されるから、スパイは敵國人であるとは限らず、

第三國人を利用する場合が非常に多いから、これ等に利用されぬやう注意警戒すること。

〔三九〕 寺内元帥は軍服の時には何時も右手をポケットに入れてゐたし、和服の時には懐手をしてゐた。又その書を見ると直線的にふるへがあり妙な味があるが、それは彼の右手が不自由だからで字は左手を添えて奇妙なやり方で書くのである。明治十年西南の役が起るや中隊長として鎮壓軍の最前線に臨んだ。三月十七日田原坂の防塞による敵に正面からぶつかつて行つたが忽ち一弾は彼の右腕を碎いた。軍醫は直に切斷を宣告し、さもなければ一命にかゝはるといふのであつた。だが彼は頑としてこれに應じない。「そんなら戦場で切腹でもして死ぬのであつた。手ん坊になつてはもう俺の軍人としての生命はない、むしろ死んだ方がいゝから放つておいて貰ひ度い。」軍醫も彼の言葉に己むを得ず切斷手術を中止したが不思議や、さしもの大負傷が癒着して経過は極めて良好であつた。かうして傷は奇蹟的に治

癒したが、その右腕はあつてなきが如きものとなつた。彼は軍人としての資格を失つたやうなものであつた。しかしその勳功と才能を惜まれて特別の取計ひを受けたのであつた。さもなければ、後年の赫々たる勳功に輝く隻腕元帥も單に隻腕の中尉で一生を終つたかも知れない。

〔四〇〕 伊藤博文は永平寺貫主森田悟由禪師に歸依し、折さへあれば越前に出かけて會談するのを楽しみにしてゐた。明治三十三年頃の會談にこんな話が傳へられてゐる。博文が憲法起草の頃の苦心をのべたり、日清戰爭當時の辛酸を語つたり談論風發して、大いに過去の勳功をひろげて、やゝ得々たるところがあつた。それを禪師は始終黙々としてきいてゐたがやがて、

「勳功を談ずる者は、なほ勳功の邊に滞るものである。勳功を忘じ去つての後、始めてよくまことの勳功を立てることが出来るのでありますぞ。惜しいことには、公はまだ勳功の邊に滞つて居られるらしい。今後更に一步を進める工夫をなさねばなりませんね。」

と喝殺してしまつた。これには流石の博文も冷汗三斗の思ひをしたことであつたが、またそ

れだけ心の持方の修練に役立つところが多かつたといふ。京城の博文寺が曹洞宗永平寺派に屬してゐるのは悟由禪師と博文との因縁に由るものであつた。

〔四一〕 帝國の占領地域は帝國領土の約七倍(昭和十七年九月現在)。

〔四二〕 明治三十七年六月二十四日、旅順沖で水雷艇第六十三號が母艦日光丸に横づけずるために近寄つたが、舷と舷との衝突をさけるための防舷物を下すひまがなかつた。激突はしないだらうけれども破損してドック入といふことになれば戦時中に申わけないことになるといふ非常時意識が乗員の頭にさつと閃いた。その時は既に舷側が相迫つてゐた。この時日光丸の手すりからするツと舷外にぶら下つたものがあつた。一等水兵藤田又一であつた。彼は身體を防舷物代りにしたのである。船はこの勇士の身體をはさんで、きり／＼と相きしつた。彼の手脚はぼき／＼音をたて、折れ、肉はやぶれた。しかし彼のこの挺身殊勳によつて船は無事であつた。そして藤田水兵自身もまた奇蹟的に生命をとりとめた。この實話を聞くものの感激は、さういふ行動の敢行に驚進する英氣を全身に湧き立させるであらう。

〔四三〕 岸本綾夫大將東京市長に就任するや、九月五日朝、軍人の戦陣馴に相當する「吏

道訓」を強調しこれが實踐を促した。

「吏道訓」の五項目は左の通りで、まづ、親切明朗と請託情實の芟除、割據の觀念打破を特に強調、市長自ら陣頭指揮に立つて挺身する旨の不退轉の決意を表明したものである。

一、諸君は修身、齊家先づ以て一個の立派な市民とならねばならぬ、しかして常に感謝報恩の念に燃え、何事に對しても親切明朗であれ、且つ知識、技能の向上を圖り、日新の事態に對應し得る能力を涵養せよ。

一、職務執行にあたつては熱と責任とをもつて、事務處理の態度は常に明確敏活であらねばならぬ。

一、自肅、自戒、常に大丈夫の志を抱き苟くも請託情實の如きに對しては敢然としてこれを排撃すべし。

一、陋習を打破、創意を發揮し市區行政を實情、實際に即させよ、特に割據の觀念を打破し事務の簡捷を圖り行政簡素化の實を擧げよ。

一、世界の強豪英米を相手として戦ひつゝあることを寸時も忘れるな。

右のごとき意氣をもつて、諸君が市政執行に當り七百萬市民に接するならば、百般の問題は極めて圓滑に進展解決すると思ふ。不肖余においても必ずや綱紀を正し、職域を明確にし信賞必罰、挺身事に當るの覺悟が出来てゐる。願はくば職員諸君も余と進み、余と共に戦ひ銃後強化、行政一新に向つて邁進し、内外の期待に副ふことを心懸けて貰ひたい。

〔四四〕 プルーノ、タウトといふ獨逸の建築家が「日本美の再發見」といふ本をかいいて日本の建築や庭園の美は世界第一であるといふた。そしてその美しさは、簡素といふ事が根本である事を、伊勢神宮や、桂の離宮の例をあげてよく説明してゐる。

〔四五〕 日本の繪畫は線の妙味に特色があり、色や形の美しさを主としない。又墨だけにかいていろいろな色を感じさせることが一つの特色である。細かにもれなく寫すといふよりも簡潔に描いて自然の本質を表はすを以てよしとする。

〔四六〕 山鹿素行の「土道」は、日本武士道の最も勝れたる教典である。その中に食時の作法につき次の如き事が書いてある。

食席に臨んでは、先づ容貌を正し左右を考へ長者箸を取て而して我これに従ふ。食するに

大口になく、食ふとき四方を見ず、顔色を正しからしむ。箸を持つ所の形、肩背の容、心をつくべし。美品なりと云ふとも其一色を嗜むべからず。魚肉をかみて汁をこぼし骨をちらして皿を汚すこと甚だ無禮なり。舌打ちを高くし、すふ音遠くきこゆる皆外人のわざなり。飲食の間世事を談じ口を開き笑ひ語ること禮に非ず。

〔四七〕 日本禮法心得に曰く。

一、容を整へ姿勢を正しくする。

二、食事の前には手を清める。

三、次の順序に従つて食事を初める。

1、禮をして「頂きます」と云ひ、すんだ時には「御馳走様」といふ。

2、飯碗の蓋は左手でとり、上向にして左側に置く、汁碗の蓋は右手で。

3、ついで貰つた飯は一旦、膳の上に置き、右手で箸をとる、箸の持ち方を正しくする。

4、飯をかへるときは飯碗の中に一口残しておく。

5、飯が終つた時には一粒も残らぬやうにする。

6、箸は茶め清めて、膳の中に落しておく。

7、湯茶は左手でとり上げ右手をそへて飲む。

四、食卓以外人の前で楊枝を用ひてはいけない。

〔四八〕 海軍大將男爵八代六郎は海上の武將として歴戦の功勞があり、海軍大臣としてシメンス事件を處理し、硬骨と剛勇とを以て生涯を彩つた。

日露戦争には淺間艦長として終始し戦ふ毎に偉功をあげたが、仁川海戦の前夜に有名な千鳥の一曲の逸話を残した。二月八日の夜彼の屬する瓜生戦隊は、仁川沖に碇泊したが、明日の戦を前にして彼は艦長室で徐ろに一管の尺八を取出し心靜かに千鳥の一曲を奏した。この一事が内地に傳はると風流艦長といふ名が高くなつた。これをきいた彼は、

「俺は軍人だ、風流人ぢやない。風流艦長などといはれるのは軍人として面白くもないことだ。」

といつて、以來尺八をやめてしまつたといふ。

彼は眞に武人らしい武人であつたが又、極めて細心な一面があつた。或時水戸から上野までの列車で偶然ひいきにしてゐた力士常陸山と乗合せたことがある。常陸山は辨當數個を買ひ彼にも一個を分けた。彼はその辨當を受取るや、先づ蓋についてゐる飯粒を、一つ／＼きれいにとり、それから箸をとつて食ひ始めたが、一粒も残さず、そして折箱を椅子の下に入れ、ひもはまいてポケットに始末した。そして言ふ。

「君……日本國中で食ひ残して捨てる汽車辨當の飯は大したものだぜ。これを集めれば立派な戦闘艦が作られるのぢや。」

〔四九〕 上野寛永寺の開山天海僧正がある時將軍家光の御前に出て柿の實を賜つた。僧正は一つ食べて終るとそのたねを懐にするので家光は、

「僧正何にするのか。」

と問はれた。「持つてかへつて植ゑます。」と答へると、

「高年の人に無益なことではないか。」

「一國の政事を執られる方がこんな性急なお考へではなりません。今にこのたねから立派

な柿の實をならせて御覽に入れます。」

といつて退出した。年を経たある秋、僧正は器に盛つて柿を献上した。家光は、

「立派なものだが、どこの産物であるか。」

「これは先年拜受いたしました柿のたねが成長して實のなつたものでございます。」

「さうであつたか。」

と感じ入つた。

〔五〇〕 島津侯の家中に平田可竹といふ弓術の達人があつた。初め可竹が弓術を學ぶ時如何なる日も決して休むことなく必ず射的場に出て稽古をしてゐた。其の射的場の横を毎日のやうに通る油賣があつた。可竹の勤勉を見て深く感じ技を學ぶにあれ程まで熱心にやれば必ず名を成すやうになれるであらう、商人が富を望むのは武士の功名を望むのと同様である、かの侍を見習ふて商賣に精を出さねばならぬと考へて、それ以來雨の日風の日も怠ることなく十年一日の如く稼業に精勵したので終に屈指の財産家となつた。

ある日その商人が平田の許を訪ねて、「私の富は皆貴下の賜ものである」と射的場で感じ

た一件の話をした。これを聞くと平田は却つて驚き、

「自分が弓を一生懸命勵んだのは、其方が晨に星を載いて出で、夕に月を踏んで歸るのに勵まされたのである。」と互に譲つて談笑したといふ。

〔五一〕 淺見綱齋は名著「靖献遺言」の著者にして近世勤王家の魁である。山崎闇齋に師事し所謂崎門三傑の一人と言はれた。綱齋が己が繼母に對して非常な孝養をつくして人々を感激させた話は有名である。繼母は弟吉兵衛方に同居してゐたが、病重るや綱齋は晝間は自分の塾で門下生の教授にあたり、晩方から母の看病を夜もすがら引受けて朝がたになつて、やつと歸宅するやうな有様であつた。しかもその看病は酷暑嚴寒といへども一日もかゝされたことがなかつた。そして母の末期まで實行されたのである。その頃京都錦小路に住んでたのがその住居から毎晩毎朝の二度はきつと御幸町松原下ルの弟吉兵衛の店へ往復するので、その道筋に當る人たちで感激しないものはなかつた。かやうに孝養の厚い人であつたからこそ綱齋の主張は生きて來る。そして彼の學問は決して單なる空論ではなかつたのである。「靖献遺言」の版刻の成つた時は前年に父親が亡くなつてゐたので「父は自分が當世に用ゐられ

ないのを氣の毒に思つてゐたが、これほどの書物を世の中に出すこと出來た自分を見たらどんなに悦んでくれるだらう」と述懐し、その版が出來ると直に亡父の靈前に供へて香を焚き、しかる後に塾生に課したといふことである。

〔五二〕 天皇は國民の事をいつも大御寶と仰せられてゐる。又、臣民たちも自ら「御民」と稱して、陛下の臣民であることを、誇りとしてゐた。「みわれ生けるしあり天地のさかゆる御代にあへらく思へば」など云ふ歌があるのもこれだ。だから子供は皆 天皇の大切な寶であつて、親の私有するものではない。いつ何時でも仰せがあれば、召し出されるのはそのためである。

〔五三〕 日本の國家は家族國家と云はれる。天皇を家長とし一億國民は皆その家族である。それは國の成立ちが、初めから祖先を同じくする神々の子孫から成り立つてゐるからである。だから忠義と孝行は一つである。

〔五四〕 統後奉公の誓に曰く。

皇室のもと、一億一家、心と心、力と力とを一つにして統後の守りかためます。

朝夕に皇軍の勞苦を想ひ戦線に送る銃後の眞心として、慰問文と慰問袋とを絶やさぬやうに致します。その留守宅の力にもたせませう。

遺族の家を護り合つて、英靈の忠誠におこたへ申します、傷病軍人には心からの敬意を表しその再起奉公に力を添へませう。銃後も國防の第一線、元氣にむつまじく、將來の大きな希望に生き、現在の苦難を戦ひぬきませう。

〔五五〕 澁澤榮一の家訓の中第一則處世接物の綱領に曰く、

一、常に忠君愛國の意を厚ふして公に奉ずるを疎外にす可からず。一、言忠信を主とし行篤敬を重んじ事を處し人に接する必ず其意を誠にすべし。一、益友を近づけ損友を遠ざけ苟も己れに詔る者を友とすべからず。一、人と接するには必ず敬意を主とすべし。宴樂遊興の時と雖も敬禮を失ふことあるべからず。一、凡そ一事を爲し一物に接するにも必ず滿身の精神を以てすべし。瑣事なりとも之を苟且に付すべからず。一、富貴に驕るべからず、貧賤を患ふべからず、唯々知識を磨き徳行を修めて眞誠の幸福を期すべし。一、口舌は福禍の因て生ずる所の門なり、故に片言隻語必ず之を妄にすべからず。

臣道實踐會

戦線の將兵に申わけのないやうな國民が、銃後に一人も居ないやうでなければならぬのであるけれども、實際は、いろ／＼な見聞を、學校にも、家庭にも、職場にも、街頭にもするのではないか。自分自身が戦争に従事してゐる氣持に缺けてゐる者すら皆無とは言へないのではないか。思へば涙もこぼれる。

これではいけない。あんなのにもどし／＼忠告を加へて、戦線と銃後とが實際に勞苦を分かち合ふやうにせねばならぬ。戦線の將兵と同じ程度の犠牲と忍苦を銃後の國民がさしげなければ、どうして總力戦最後の勝利に輝くことができやうか。かう言つてもなほ起ち上らうとしないならば、鐵拳をも下したい。

臣道實踐會を各地に結成しよう。君と僕とでこの「戦時生活訓」を一箇條でも實踐して行かうと言ふところから始めて貰ひたい。きつと大きな力となつて、全國に波打つ日を期待することが出来る。(連絡は發行所内)

臣道實踐會要覽

- 一、職場に學校に隣組に部落に臣道實踐會をつくらう。
- 二、そして戰時生活訓を實踐して銃後にも忠誠を顯現しよう。
- 三、それが生産的にも道義的にも戦力を増強することになるのだ。
- 四、お互に力になり合つて、勵まし合ひ慰め合ひ大東亞戦争の勝利を戦ひ抜かう。
- 五、講師の派遣や調査研究の求めに應ずる必要から中央會を發行所内に置かう。
- 六、會の組織や運営については遠慮なく相談してほしう。一切無料應答する。

不許複製・檢印



定價金七十錢

昭和十七年十一月一日印刷
昭和十七年十二月八日發行
出文協承認ア二九〇一四四號
發行部數一〇〇〇〇部

著者 臣道實踐會

發行所 長里清

東京市瀧野川區西ヶ原町九〇八
東京市小石川區原町一六
發行所 日本文化研究會

電話大塚四八八二番

東京市板橋區板橋町八ノ一九五二

印刷所 小出印刷所

(東京一九三四) 小出印刷所

東京市神田區淡路町二ノ九
配給元 日本出版配給株式會社

429
219

終

U

¥0.70